

振り出し

「只今、台北よりエバー航空一五七便が到着致しました」

二〇一三（平成二五）年一〇月、秋も深まり旅行者で賑わう石川県にある小松空港の国際線到着ロビーに、入国手続きを済ませた乗客が現れる。

その中でひと際大きな荷物をカートに載せて足取り軽く出て来たのは、金沢市から山手に車で三〇分、名峰白山の麓、白山市鶴来本町の住人で清酒「萬歳楽」の蔵元小堀甚九郎（以下 甚九郎）だった。

甚九郎は開口一番、入国管理官が「職業は何ですか」と聞いてきたので「パスポートの生年月日の欄を指で示すと目を丸くしとった」と金沢弁。出迎えたのは金沢市香林坊の指物師、西田守男と、金沢市若松町の旅行屋の私だった。甚九郎は九〇歳を超え髪は白髪であるが豊かな髪で、昭和天皇をほうふつとさせる容貌。今回は台湾の南、高雄市の知人を訪ねた一人旅。出迎えた二人とは二十歳程の年の開きがあるが、その言動などは二人と同年配か時には逆転していると思わせる。その万年壮年と二人のつながりは、茶の湯と旅である。

指物師は二代目で趣味がお茶で、金沢市の小立野にある旧加賀藩前田家の菩提寺「宝円寺」の茶の湯の会に通った折、甚九郎の孝子夫人と知り合い小堀家と仲良しになり、私は、（財）日本交通公社（現 JTB）に入社以来、旅がご縁で半世紀に渡りお付き合いさせて頂いている。

そんなある日、何気なく旅の本棚から、岩波文庫の芭蕉の紀行文「おくのほそ道」一九七九（昭和五四）年版を取り出し読み始めた。

### その序章の冒頭

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口をとらえて老をむかう物は、日々旅にして、旅を栖とす。

(意識) 年月は戻らない旅人であり、船頭は一生を舟の上で過ごし、馬方は馬を引いて生涯を旅する。

船頭や馬方の様に私が添乗員として六〇年、旗を持ち旅のご案内をして来たことに繋がる。芭蕉にお供をして旅をした河合曾良の「曾良旅日記」もこの岩波文庫に併載されている。

四五年程前、私が名古屋のJTB運営のホテルに出向した当時、JTBの先輩で宿泊部長の岡本耕治おかもとこうじが曾良について研究しており、時々、俳句や旅の話で盛り上がった。そして、本人著作の私家版「曾良長島日記」の他、数冊の曾良に関する本も頂き読み重ねた。江戸時代に芭蕉が地方での五カ月に及ぶ旅は、曾良と共に自然を愛で、季節の移ろいを俳句に詠み、土地の人々との交流を楽しむ旅となっている。その自然を愛する旅姿はコロナ禍後の旅のヒントになるかもしれない。

徳不孤必有隣（徳は孤ならず、必ず隣有り）

甚九郎の友人の京都大徳寺の塔頭 徳禅寺の橋宗義和尚の筆によるこの茶掛けが手元にある。その論語の言葉通りに温和で、あなたにも親身になって向かい合う甚九郎の周りに集うお仲間との交流や、私が「旅は道ずれ 世は情け」をモットーに国内外をご案内したお客様との旅の記録を、二〇年程前に地元紙の北陸中日新聞に「添乗員日記」として連載したことがある。

今回はそれに加筆、修正、更にその後の記録を追加して、旅を楽しみ、商いは堅実に、仲間を大切に作る皆様の旅の栖すみかを「添乗すごろく日記」としてまとめ事にしました。市井しせいの暮らし向きしせいの一端も垣間見ていただければと思っています。

それでは、「すごろく」のサイコロを振ります。

## ワインのお返し

北陸にあるDデパートのお客様をご案内してヨーロッパに添乗した時の事。

団員は女性二十名、男性は二名と添乗員の計三名。スペインを廻り最終目的地パリの「アンバサダーホテル」にチェックイン。一九七七（昭和五二）年九月、とはいえ、コートが欲しくなるくらいの肌寒い年だった。

夕食は当時ミシユランの三ツ星レストランとして大変有名であった「マキム・ド・パリ」。デパート側から最終日は名のあるレストランでの、さよならパーティーを入れてほしいとのご要望があったので組み込んだ。

さあ出陣とホテルのロビーに、この夜の為の衣装を身にまとい、紅潮した面持ちで集合した女性陣の、シックなようで華やかさを秘めた立ち姿に、ロビーが一瞬にして社交場が変わったように感じられた。そしてロビーにいた外人客の囁す口笛も聞こえてくる。

今夜の従者である男性はもちろんダークスーツで、こちらは残念ながら地味と判定せざるをえなかった。それでも旅先で仲間が華やかさを評価されたことは三名共に誇らしく思っていた。そしてコンコルド広場の近くのレストランに迎えの車で向かった。

かの有名なギリシヤの海運王オナシスが店の常連と聞いていたので、添乗員としていつもより多めにチップを用意している。ところが案内された席は二階の奥の生演奏が聴きにくい意外な場所だった。周りを眺めると満席状態が見て取れたので仕方なく料理の説明の後にワインのテストイングに入る。ワインは推薦のハウスワインでボルドーの赤を選んだ。

一口飲み干した際に小首をかしげてしまった様だ。何故だかワイン通でもない私が注文を付けられるはずがない。すると控えていたウェイターがすつ飛んできてグラスとワインを引き上げた。調理場の衝立の陰でソムリエと思しき人が、今開けたボトルのワインをグラスに注ぎ口に含んでいる様子、今度はそのソムリエが「おいしいワインなおかしいな」と小首をかしげたようだ。

その時、受付のマナージャーがソムリエとの打合せに上がってきて、替わりのワ

インにOKを出してお待たせの晩餐会が始まった。マネージャーは混雑を詫びて戻って行ったが、料理の終盤にマネージャーから特別サービスとして、メニューとは別枠でアイスクリームに採れたての木苺を添えたデザートが出され、全員がうまいと声を上げた。メインのステーキも抜群だったが、デザートは帰国してからも口の端にのぼる程の味だった。チップの作用も見逃せない思いがした。

日本の団体の食事マナーは騒がしいというのが当時の定評だったが、海外旅行に出かける人が多くなり、すっかりマナーも向上してきていると感じていた時だったので、通り一遍の扱いに首が横向きに反応したのかもしれない。しかし近年は有名レストランが競って日本人客にウエルカムのサインを送っていると聞いている。

## 先輩添乗員

「君が住んでいる金沢市大衆免中通りたいじゆめなかどう（現 森山一丁目）で生まれた政治家を知っているか」「はい、近所に大臣をされた人の生家があります。名前ははつきり覚えておりません」「その人は、戦前、近衛内閣の大蔵大臣をされた小倉正恒おぐらまさつねさんだ」

一九五九（昭和三四）年九月、朝から陽射しがじりじりと蒸し暑い日だった。国鉄金沢駅（現 JR金沢駅）から徒歩で一〇分程の「武蔵が辻むさし つじ」の本通りに面した（財）日本交通公社金沢案内所（現 JTB金沢）、木造二階建ての店舗に入り右手にある階段を上がる。どんなに遠慮がちに足を運んでも足元でギシギシ音がする。私の家と同じだと感じて緊張が和らいだ。

その二階の事務所の奥まったところにある和室が、新入社員採用の面接会場で何人かの後に名前を呼ばれて部屋に入ると、面接官の前の座布団を勧められた。扇風機が一台申し訳なさそうに乾いた音で回っている。面接官三人の真ん中は白髪で蝶ネクタイ、その左側が最初の質問者で見覚えがあった。

高校の九州修学旅行に参加した時、三五〇名を超す学生と教師を乗せた団体列車が金沢駅から大阪に向けて出発、紺地に金色の刺繍で日本交通公社と入った腕章を巻いた大柄な添乗員と列車で同席となる。

二時間程列車が走った頃に車掌が来て「列車が遅れており大阪での接続が心配だ」とその添乗員に告げた。すると添乗員は、うつらうつらの様子だったが、時刻表とにらめっこして「米原駅で東海道線の定期列車に乗り換える」と決断して車内に号令をかけると、突然のことで生徒達は慌てたものの、無事乗り換えが完了して大阪南港からの別府港行き関西汽船に、ぎりぎり間に合った。

「添乗員」当時はまだ耳慣れない言葉だったが、ようやく人々の間に旅行を楽しむ気運が盛り上がってきた頃で、新鮮に感じてこの出来事が記憶に残っていた。その添乗員本人が目の前において名札は副所長 中村繁次なかむらはんじと表示されている。

「近くの馬場ばば小学校からは、小説家の泉鏡花いずみきょうかや徳田秋声とくだしゅうせいも出ているぞ」と副所長は続けて言った。

ここで蝶ネクタイの中部支社総務課長が「町の様子をもう少し話して下さい」流石に明治時代創業の旅行会社の幹部、歴史に興味をつないだように感じた。

旧加賀藩前田家の江戸時代、信州経由で江戸まで片道四八〇キロを藩主が参勤交代で一年おきに行き来していた。片道一二泊一三日（現 北陸新幹線は同じルートで二時間三〇分）で、その行列が多い時には約三千名に及んだと言われる。行列が金沢城を出立しゅつたつして間もなく、浅野川にかかる浅野川大橋を渡り街道を北に向かって進むと、右手には東の廓（現 東茶屋街）がある。

街道を更に進むと左手には大衆免地区だいじゆめが奥の方にひろがっており、表通りから一歩入ると狭い路地が入り組んでいる。右手は東山地区と呼ばれ多くの寺院が町の要として役割を果たしている。この両側一帯は職人が多く住み、金箔、建具、着物の仕立、大工などで生業なりわいを立てており銭湯も珍しくない。質屋も江戸時代からの老舗が今も商いをしている。私の家は祖父が菓子職人で、戦前から大衆免地区で小さな和菓子屋を営んでいた。

ある時、祖父から松尾芭蕉が「奥の細道」で、富山県と石川県の県境にある倶利伽羅峠かりらとうげを越え、北國街道を東から金沢に入り、最初の一泊をこの街道沿いの旅籠はたごで過ごしたと、近所の碁仲間、浄光寺じやうこうじの北森住職から聞いたと話してくれた事があった。

副所長のリードで終始したこの雰囲気は、旅行業に対する自分の思いと一致した部分があり正直ホッとした。しかし、やんちゃ坊主で戦時中に両親を相次いで亡くした一人っ子が、合格内定をいただくのは無理と考えていたが、中部支社から九月二三日付の内定通知が届く。封筒に入った通知書が今も手元にある。

## 六〇年前の仕事場

副所長と何度目か入社前の打ち合わせの時、今度はこちらが質問者となった。

本人は戦前ジャパン・ツーリスト・ビューロー（日本交通公社の前身）に入社して中国大陆で鉄道輸送業務、宿泊斡旋等に携わり戦後まもなく引き揚げ、金沢案内所に復帰したと話してくれた。中華そばが真っ赤になるくらいに唐辛子をふりかけて「ガハハ」と笑いながら流し込む大陸的な雰囲気の時が解けた。

金沢に復帰当初、案内所の仕事は国鉄乗車券の販売が主だったが、戦後間もなくの頃で列車の運行本数も限られており、収入も充分でなかったようで、なりふり構わず大衆雑誌や下駄の販売の副業も手掛けたそうだ。

「一九五五（昭和三〇）年、新たに個人、グループ用の周遊券が企画、販売され旅行ブームに火がついた。これからは団体旅行や外国旅行も多くなる。当社も組織が変更され営業中心になると思う。衣、食、住、旅は人間が生きてゆく為には欠かせないものである。現在の社員の平均年齢二七才、社員数約三千名、これからので大いに頑張つて欲しい」と発破をかけられた。

趣味は「庭の散歩」と聞いていたので、副所長の自宅を訪ねる機会があり、お庭拝見を楽しみにお宅に伺った。奥様に「ここがお庭ですね」、直ぐに「お庭三步」の聞き違いだと気が付き、本人は何処かと見回すが姿が見えず、茶目っ気もたつぷり持ち合わせていた。

翌年、一九六〇（昭和三五）年に入社、連日お客様が案内所の受付カウンターに二重、三重となり 電話は鳴りっぱなしで、両手に受話器を持ちコードが絡つくところが当たり前前の忙しさ。そして切符の発券が手作業のため手間取り、二階の和室で寝泊まりする毎日が続いた。

当時の周遊券が手元にある。国鉄高山線下呂駅から下呂温泉までのバス券には大人九円、小人五円の料金が表示されている。お客様の日程に合わせてこれらの券をセットし代金を頂戴する。ところが毎日の売り上げ集計が時々合わない。

当時の山村信義係長（後の金沢支店長）が、その度に「明日からバスの車掌さんが首から下げているバッグを皆にも下げてもらう」、特に新入りに向かって吠える。一円単位のお金の収受に心血を注いだことが懐かしく思い出される。

そして一九六四（昭和三九）年、東京オリンピックの開催、東海道新幹線開通、海外渡航自由化、会社の組織は財団から株式会社となり、盆と暮れが一緒に来た様な塩梅で、個人、グループから団体営業に配属となり添乗業務が新たに加わる事になった。

## 長江大遠泳大会

北京滞在四日間の視察を終えて、北京駅から西の武昌駅までの二〇時間の列車の旅が始まるうとしていた。北京発一三列車は一五時発で、出発までまだ少し時間があつたので列車の編成を調べていた。

一九七六（昭和五一）年七月、日本交通公社社員学習訪中団の一員として参加した。四年前、田中角栄総理の訪中で日中国交正常化がなされて、これから観光が目玉になると社員を視察・研修に派遣していた。今回はその第三回目、本社の皆川慎吾常務役員を団長に一九名。定刻に出発した列車は、見渡す限りの田園地帯を横切って走る。

時々、線路に平行して走る道路の工事が目に入る。数百人と思われる人々が一列になって大きな杵で道路を均している。「万里の長城」も杵で均していたと聞いたことがある。近くに住居らしきものは見当たらない。地平線に沈む夕陽は大きく人々は何処に帰るのだろうか、中国人の思考回路はどうなっているのか、六日間に渡るこれからの行程に興味と脅威を感じた。

七月一五日の午前一一時に中国の中部、湖北省武漢市の表玄関である武昌駅に着した。気温は摂氏三〇度を超えていた。武漢市には武昌、漢陽、漢口が含まれる。

宿泊は漢口の勝利飯店で。チェックインを済ませて早速ミーティングが行われた。

通訳兼ガードマン役の作業員三人が同行しており、団員名簿で私が最年少なのを知っているのか、若い通訳がしきりに話しかけてきた。営業で日中友好協会に出入りして中国情報を得ていたのでなんとなく馬が合った。

その通訳に「武漢を歩いてみたい」と頼み込み、夕食前の三〇分位ならと数人で出かけた。町は街灯も少なく夏の夜のムツとする雰囲気に目を凝らすと、細い路地に沢山の人が飯碗を持ち、大きな箸でご飯を口にかきこんでいる。殆んど上半身が裸だ。日中戦争の時の事が伝わっている様子が感じられ、黙って視線だけを向けて来る。

ホテルに戻ってから、その若い通訳が共産党員で、団体を案内する責任者だと分かった。「明日は、皆様を毛沢東主席の長江遠泳一〇周年行事に招待します」と夕食時にその通訳から告げられた。武漢市の漢陽と武昌の間を流れる、中国最大の川である揚子江（現 長江）は豪雨の後のように、岸のちよつとしたでっぱりにも茶色く濁った水が、激しくしぶきを上げて跳ね返り流れている。

翌日、武漢と上海の間の揚子江を上り下りする、三千トンの客船を貸切りで乗船し川の中央付近で停船した。左岸から黒い一団が川に入り濁流を泳ぎ出している一団また一団と対岸に向かっていている。よく見ると銃を担いでいる人や、スローガンを書いた旗をもっている人もいて、全員が首から紐でつないだ浮袋を流している。

川の中程位に一人、二人と流される者を抄い上げる船も待機していた。

毛沢東主席が元気な姿を国民に誇示するため、この揚子江を泳いで見せたのを記念する行事で、小・中学生を中心にした百人の集団が二〇組、二千人の大遠泳大会なのだ。川が黒くなったように感じた頃に客船は対岸に着いた。そこには先頭集団で泳ぎ切った生徒たちが黒山のように集まっていて、我々の下船を拍手で迎えてくれた。

観光地の視察、地方料理の吟味、交通機関の状況調査に加えて、中国医療の現場見学、人民公社の家庭訪問、そしてこの記念行事の組込み等、きめ細かい日程を誇示する中国側の熱意に団員から驚きの声が上がった。

この年は、一月に周恩来首相が亡くなり、そんな情勢の中で我々を受け入れられた事で、窓口の中国国際旅行社の観光政策に対する並々ならぬ思いが感じられた。更に帰国後の九月には大黒柱の毛沢東主席が亡くなり、一〇月には文化大革命を主導する四人組が逮捕されるに至った。

この激動の中を巡ったのを知った甚九郎から、所属する金沢のロータリークラブで「中国を見てきた現況」を報告してほしいと連絡を受ける。上海の中日友好病院で、中国医療事情を病院の年配の幹部が我々に説明していた時、共産党員の若い通訳が何度も幹部を叱責する場面、又、上海の工場見学ではスローガンは立派に掲げられているが、工場内の人の動きが鈍く活気が全然感じられないこと等、文革の影響をうけて疲弊している様子等を話題にした。

しかし市場で触れ合う人々や、商売をしている人たちは明るく、又、私利目的の旅行社も認められたようで中国には観光のうねりが押し寄せている事を、この研修でしっかりとつかむことが出来た。

## 市井しせいの商人あきんど

一九六六（昭和四一）年六月、全国酒造組合連合会の全国大会が金沢市で開催された。金沢市観光会館（現 金沢歌劇座）が開館し、ようやく大型の大会開催が可能になり、金沢での開催を待ち望んでいた団体の一つで、開催の前年に情報を知りセールズを開始した。

その時に出会ったのが白山市鶴来町の酒蔵「萬歳楽」の（株）小堀酒造店の社長小堀甚九郎だった。一九二三（大正一二）年生まれの当時四三歳。組合の石川支部の役員で、大会では親睦委員長として遠来の会員のおもてなしを担当された。そして参加者の宿泊手配、大会後の観光コースの打合せを何度も重ねた。

観光の能登コースの下見に甚九郎は、愛車の米国車の水色のプリムスを用意して能登に向けて出発したが、車は国産に比べて車高が低く能登の未舗装の道路に悪戦苦闘した。プリムスの左右のテールが飛行機の垂直尾翼の様で、それが上下左右に大きく揺れる、車の底を地面の凸凹がこする。必死の思いで脱出に力を合わせた事が、半世紀にわたりお付き合いさせていただく絆になった。

石川県は日本の真ん中で集まり易いことや、人気のある温泉や観光地があることから大会参加者は一千二百名を超え、観光参加者も七五〇名に達した。梅雨空が心配の一つだったが、幸い大会期間中は雨に降られることはなかった。

当時は大きなホテルも少なく、旅館が主力の宿泊となり、分宿や相部屋となることはやむを得ないことだった。それでも観光が盛り上がりればお酒の需要も見込める思いもあったのか、和気あいあいと大変な賑わいを見せて大会は無事終了した。大会事務局の皆様や甚九郎のご尽力の賜物であり深く感謝している。

大会終了後、暫くして甚九郎から電話があり「今度の休みに高山へ行こう、奥さんも」と誘われた。大会準備の資料作成や、参加者の部屋割、名簿作り等事務所で出来ない手作業が多かった事で、JTBに一時席を置いた妻が手伝ったのではないかと思われたのかも知れない。

昼食は高山市内の料亭「洲さき」<sup>ナ</sup>で、茶道宗和流のお客をもてなす本膳料理を二百年以上守り続けている名店。又、創業百八〇年以上の手描きの洪草焼窯元の「芳国舎」、同じく百八〇年以上の和菓子老舗の名物草餅「とらや」。

折に触れて訪ねても、「洲さき」は料理、器、佇まい、女将も美人そのまま、「芳国舎」は当時求めた湯飲み茶碗が今も同じ絵柄で作られている。「とらや」は、昔からのこじんまりした間口のお店で同じ味。いずれも地道に商いを続けている様子だった。

ところで小堀家は1717〜35年（享保年間）に酒造業を創業、二五〇年以上続く清酒「萬歳楽」の老舗で、甚九郎は一四代目で早稲田大学卒業と同時に家業を継ぎ、一九五五（昭和三〇）年に社長に就任した。夫人は金沢市にある酒造会社で清酒「日栄」<sup>にちえい</sup>のオーナー中村英俊<sup>なかむらえいしゅん</sup>の長女。中村英俊は名代の古美術収集家でもあり、晩年に収集品を金沢市に寄贈。現在の金沢市立中村記念美術館に収蔵展示されている。李朝時代の青井戸茶碗（銘・雲井）<sup>あおいとちやわん</sup>等名品が多く茶処金沢にふさわしい美術館になっている。又、旧本宅や「茶室・耕雲庵」<sup>こううんあん</sup>も美術館と同じ敷地に移築されて市民のお茶会等に利用されている。

甚九郎ご夫妻には四人の娘さんがいて、時々お里帰りなどで鶴来のご自宅でお目にかかることがある。どなたも質素で慎ましやかにしておられる。

## インディアン・パシフィック号とエアーズロック

「これから気の合った夫婦一〇組程で、年一回ゆっくり世界旅行をしたい」との事で、一九八八（昭和六三）年 六月、甚九郎が金沢の事務所に来られた。名古屋のJTB運営ホテルに出向三年、富山県のJTB高岡支店に復帰して三年。今回は金沢市に個人、グループ旅行専門の「旅のサロン金沢」が開設され責任者として着任二日目の事だった。

名古屋のホテルには何度かお見えになり、高岡支店にもよく立ち寄られたので一段落してからと思いい動はまだ連絡していなかった。突然のご来店と情報キャッチの速さに驚き、商売に大切なのは情報だと改めて六五歳に教えられた。

「条件は北河君がまだ足を踏み入っていない場所を入れる、朝ゆっくり出発して夕方早めにホテルに入り同じ場所で二泊する、日程の中程で一日ゆっくり何もしない日をつくり、日数はお任せする」と、まるで金沢に戻って来るのを見越していたかの様に具体的だった。そして開店第一号のグループ申し込みとして誠に有難くお受けした。

早速、第一回目はオーストラリアの大陸横断鉄道に乗り、エアーズロックに登る一〇日間のコースに決まった。甚九郎は時刻表マニアでもあり、日頃から自分が動く時は詳しく計画を立てる。サーカスの様な際どい乗り継ぎが得意で、列車や航空機の知識はこちらが舌を巻くことばかり。そんなことから長年思い続けてこられた「インディアン・パシフィック号」に乗るコースを選ばれた。

予約手配を開始したが、当時この列車は日本ではまだ馴染みは薄かったが、欧米の観光客には大変人気が高く予約が順番待ちの状況だった。今回は英国の旅行会社トーマス・クック社の予約枠で何とか確保出来た。さすが世界の旅行会社の草分けだ。

一九八八（昭和六三）年一〇月、夫婦八組と添乗員。オーストラリア西海岸のパース駅を午前九時発、中央部のアデレード駅迄の二泊三日が始まった。車両の通路がS字カーブを描いており、その膨らんだ部分に二人用個室（洗面、トイレ付）がある。そのため車両の入り口から反対側が見通せないのです、人の動きも感じられずプライベートな感覚になる。客車のほか、食堂車、ラウンジカーが付いている。

この区間は二五〇〇キロメートル（札幌から鹿児島までの距離）で、途中ナラボ  
ー平原では約四八〇キロメートルが直線区間となっている（北陸新幹線の金沢駅か  
ら東京駅間の距離に相当）。当然、機関士の居眠り防止策があり、三〇分毎に運転  
手が運転台にあるボタンを押さないと列車は自動的に停止する。又、列車の線路と  
並行して道路があり、時々道路脇の立ち木に自動車がぶつかって、ひっくり返り放  
置されているのが目に入る。自動車にも強力な居眠り防止装置が必要だ。

当初、列車の旅は退屈しないか一抹の不安があったが、日中はラウンジカーで  
談笑する、持参した本を読む、また広大な大地の風景を楽しみ夜はお酒をたしなむ。  
「こんなに夫婦でゆっくり過ごす時間を今まで持ったことは無かった」と好評だっ  
た。翌々日、アデレード駅に午後二時に到着、そのままホテル向かった。

アデレードに一泊後、オーストラリアのへそと呼ばれるエアーズロックへ空路を利  
用した。到着後、空港からバスでエアーズロックの登山口に着いた時、ここでハプ  
ニングが起こった。

団員の一人が青白い顔をして「この山は危険やから、登らんとこうや」一瞬何の  
ことかと当惑していると、もう一人が「そうや、そうや」どちらも大柄な体格の男  
性。標高約三五〇メートルで山全体が大きな岩、中腹迄は急高配の為、鎖を頼りに  
岩場を登る。そのために全員が軍手を用意している。

ひよつと見ると、登り口の岩のところに登山中に落ちて亡くなった人のレリーフ  
が五枚ほど埋め込まれている。とっさに、この二人は高いところが苦手なのだ判  
断して登山をご遠慮願った。他の団員は緊張感の中、山頂から三六〇度見渡す限り  
の平原を眺めた。下山後、夕焼けに染まる山を背にホテルに戻り、ホテルでの夕食  
時に、観光案内所でたまたま見つけた「登山証明書」をそれぞれに配った。

その二人には「エアーズロックには足も掛けなかった」と、英文で書かれたのを  
用意して読み上げると全員が拍手喝采、大男の二人も一緒に大爆笑となった。

そして翌日は旅行の条件の一つ、何もしない日にあたり、昼食の確認にホテルの  
プールサイドを横切った時、プールの上空にヘリコプターが飛んでいた。

プールサイドには色とりどりの布地の少ない水着姿の女性や、二人づれが歩いたり  
泳いだりしていたので、それを何気なく見とれていた。

確か一五分位しか経っていない頃だと思う、屈強な大男が私に近づいて来て、ヘリコプターを指さして何か言っている。良く聞いてみるとホテルのコマーシャルの撮影中で、大分待っていたが場違いなスーツ姿の私が動かないのでしびれを切らしたようだった。道理でスタイルの良い美人が多いはずだ。プールサイドから離れた場所に誘導されヘリコプターにOKのサインを送った。こうして何とか無事終了した第一回目から毎年続く事になる。団体名は勿論「小堀ツアー」となる。

「エアーズロック」は二〇一九（令和元）年一〇月から登山禁止になっている。

## 五円で企業を興した

大手電機メーカーM社の金沢営業所長だった林<sup>はやし</sup> 敦<sup>おさむ</sup>は、過労で入院していた病院で、週刊誌にとじ込みになっていたミサワホームの代理店募集のハガキを見て、ものは試しにと五円切手を貼って投函した。

一九六八（昭和四三）年の事で、林社長がよく言う「五円で企業を興した」だった。こうして北陸ミサワホームは誕生したが、当初はプレハブの認知度が低く「柱の無い建物は住宅ではない」などと言われて、思うような引き合いが無かった。そこで、まずは親戚にモニターになってもらおうと考えた。そんな弟の苦境を見ていた姉が名乗り出て、学校の先生をしていた夫に「弟が行動する事に間違いない」と説得して連絡、弟は必ず成功させると心に誓った。

それからは、会社の取り組みが、お客様には親切丁寧、デザインも良く耐震性もあること等から人気が高まり受注が増える。今度は資金繰りだ。受注が多くなると完工までの間に運転資金も必要になる。そんな時、銀行の支店長が信用もまだ充分でない中、林社長の律儀な仕事ぶりを見込んで必要資金の要望に応じてくれた。今でもその事を有難く当時を思い出して口にするところがある。

それでも、当初は社員の定着が思わしくなく、「社員との集合写真を見ると、毎年変わらないのが私と弟の専務だけで、他のメンバーは皆入れ替わっていた」と苦笑する。そんな時が何年も続いたので、そこで率先して徹底したお客様へのアフターフォローを考えた。完成引渡し後に、担当社員とは別に月三回そのお宅を訪問し

交流を深めた。初年度は年間三六回、二年目は二四回と続けた頃にはお客様からボツボツと新規のお客様のご紹介が出始めた。社員も住宅商品に自信が付き積極的になり、お客様へのアプローチが目を見張るようになってきた。

社員の定着も良くなり営業成績も向上して、当時のミサワホームのオーナー三沢千代治ちよじの目にとまり、アメリカカ住宅事情視察団に全国代理店の五社に選ばれ招待された。その時の様子を「三沢千代治と一緒に最高級車キャデラックに乗って来た」と自慢するが、その乗り心地がどうだったか聞くのを忘れた。

## 機長と社長

一九九三（平成五）年四月、小松空港から日本航空のチャーター便は二五〇名満席でホノルルに向けて出発。北陸ミサワホーム（株）の創業二五周年記念行事として実施された。社員の福利厚生に力を入れており、これまでも海外旅行を実施しているが、チャーター便利用は今回が初めてだった。機内に乗り込み安定飛行に移ってから、暫くして林社長が機内のマイクを通して挨拶を行った。

「皆様、本日は日本航空にご搭乗いただき誠にありがとうございます。私は当機の機長ではありません。北陸ミサワホームの社長です」こう切り出したのを耳にした時、計画当初から定期便利利用よりも、運賃等が割高になる等リスクがあるチャーター便を希望した謎が解けた思いがした。

一代で従業員が関連を含め三百名を越え、そして二五周年を迎えて社員の貢献に報いたいという思いがひしひしと伝わって来た。男のロマンが込められていると強く感じて、何としても成功させなければと添乗員一同さらに気を引き締めた。

ホノルルのハイヤット・リージェンシーホテルに宿泊した翌朝のことだった。

「社員が一人朝方から苦しんでいる」と連絡が入った。早速その部屋に行く昨夜から若手の社員が飲み会を行っていた様子だった。ホテルのセキュリティに連絡して救急車を手配し病院に同行した。救急車内では、救護員が旅行保険の加入の有無を確認、加入していることが分かると車を右折させ、左折すると加入していない人が行く病院だと救護員が言った。

急患入口で手続きを済ませ診察が始まった。しばらくして健康状態を調べたいが言葉の問題もあり一緒にトイレに入って欲しいと言う。そこでトイレに患者が座り女医と私が入り診察が始まった。患者は男性で結果は急性アルコール中毒で一泊入院が必要と診断された。

ホノルルの中では、設備の整った屈指の病院で、部屋はすべて浴室付きでホテルと見間違える程だ。看護師は明るく親切で美人が多い。見舞いに来られた林社長は患者の病状にほっとしたのか「わしも一泊入院しようかな」と軽口をたたく。「入院の目的がはっきりしない」と言い返した。

林社長はホノルル四泊滞在中、ホテルの部屋やフロント周り、またはロビーに出て出入りする社員を見つけて、いつもの陽気さでコミュニケーションを熱心に行っていた。ホテルから離れることなく、団の全体に気を配っていて頭が下がる思いだった。旅行の最終日、モアナ・サーフライダーホテルでの「さよならパーティー」で、お礼の挨拶をされる林社長の目にきらりと光るものが認められた。

## 沈まぬ太陽

ノルウェーのオスロから空路で二時間、北緯七〇度の「北極圏の首都」と言われるトロムソに入ったのは、一九九〇（平成二）年 六月、第三回目の「小堀ツアー」だった。沈まぬ太陽（ミッドナイト・サン）を観る目的で、これまで多くの北極探検隊の出発地となったトロムソを選んだ。

その年は例年に比べて気温が高かったが、それでも空港に着いたのが昼近くで温度計は摂氏五度だった。海岸近くの水産市場や、極地の空に向かって立つ、トロムスダール教会からの荒々しいフィヨルドの景観を満喫した後ホテルに入った。

夕食後、休憩をとり、真夜中にバスで郊外のストールステネン山に向かった。街は白々と夜が明けようとしているような薄明かり、家々は戸締りをして眠りについている様子、ここの鳥は寝不足で時々落ちると言われるが、満更冗談ではないかとも思ってしまう。

ケーブルカーで登った山頂は身を切るような寒さ、防寒具にくるまって砂利を踏みながら小高い丘に向かったが、我々の他には誰もいない。そこからの眺めは、フィヨルド湾の水平線上で太陽が夕陽となり黄昏の雰囲気を醸し出していた。ところが夕陽は一〇分経っても二〇分経っても同じ位置から動かないように見える。そしてそれぞれが写真に収めるのに一生懸命になっている時だった。

「なんや太陽が沈まんだけやがいや」と金沢弁で誰かが呟やいた。その言葉にまわりは一瞬沈黙、そのあと、静けさを破るように笑い声がこだました。しばらくするとキラキラと輝きを増してきて、水平線上から朝日となって昇って来た。今まで体験したことのない光景に全員が言葉を発することなく息をのむ様子で見つめていた。

今回、初めて老婦人が娘さんご夫婦と参加された。デンマークのコペンハーゲンで八〇歳の誕生日を迎えられたので、夕食時にバラの花とケーキでハッピーバースデーを合唱してお祝いした。最初にお目にかかった時から「大変お元気で、素敵なお方だ」と思っていた。食事が進みデザートになった頃、一片の紙切れが私に回ってきた。

賜りし バラの花見て 旅の癒え

嘉子よしこ

と美しい文字でしたためてありお返しの俳句だった。添乗員が団体を統率するためには、常に公平な態度でお客様に接することが求められる。ところがこの時ばかりは、そんなことが吹き飛んでしまう思いだった。翌日は、有名なチボリ公園をお客様気分でウキウキとして回ってしまった。

コペンハーゲンからの帰途「いつの日か、次回は北極光（オーロラ）を見に冬のトロムソを訪ねたい」と誰からともなく話題になった。

## 陶芸家 西岡小十にしおかこじゅう

「小堀さん、あそこの山の白い部分に、いい土が覗いていますよ」

福岡空港から石川県の小松空港に着いたばかりの唐津焼の陶芸家 西岡小十にしおかこじゅうが後部座席からはずんだ声で言った。一九九七（平成九）年八月、濃い緑が青空に映える

山並みの中に、唐津の土に良く似た土があると言うのだ。出迎えて車を運転しているのは甚九郎だった。

「あの山は、鶴来町の隣の辰口町だたつのくちまちと思う。明日、金沢の陶芸家・森山君に現地へ来てもらって調べよう。小十さん、今日は鶴来の和田屋わたやに宿を取ってあるので直行しましょう」。小十は今すぐにも現地に行きたい素振りだったが、しばらくして長身の身体を後部座席に沈めた。小松空港から車で四〇分、名峰白山の麓にある鶴来町は、全国白山神社の総本宮、白山比咩神社しらやまひめじんじやがある。

翌日、その本町通りにある小堀家宅、母屋おもやに入ると土間があり、上がりかまちに二〇畳程のおえがある。おえには囲炉裏が切っており、自在じざいかぎ鉤でつるした茶釜に常にお湯が沸いている。親しい人達が集まる紅茶の会に、昨夜、和田屋で甚九郎と一緒に山菜や鮎料理で夏の夜を楽しんだ小十と、金沢の陶芸家、森山邦応もりやまくにおうの姿がそこにあつた。

「鮎、おいしかったです。大吟醸『白山』も充分戴きました。本当に有難うございました。ありがとうございました」小十は肩口から愛用のバックを下し挨拶を交わした。

「小十さん ダージリンの春摘み茶葉はるつちやばファーストフラッシュをいれたのでどうぞ」甚九郎は、いつもの様に大切な人と、紅茶の時間を楽しもうとしていた。隠し味のウーロン茶を少量入れられるのもこだわりだった。水も酒造家らしく自宅の水と白山麓とろりしえの鳥越地区の湧き水をブレンドして使用、孝子夫人は傍らで、甚九郎の好物「ガトーフエスタハラダ社」のラスクを用意している。

「これから、森山君と一緒に辰口町役場を訪ねて、陶土のある場所を確認して現場に行こう」と、なんとなく腰の落ち着かない小十の様子を見て甚九郎が言った。それを聞いた小十は「はい、土の状況を見ないと何とも言えません楽しみですよ」と言っ、ようやく紅茶を口に含み、隣にいる森山に笑顔を向けた。

現場の土地は町の所有地だとわかり、町の担当者たしやと現場へ急いだ。「唐津の土と似ているし、百年位は使える量があると思う。現在、各地の陶土が足りず苦勞しているのに、此処にこの土が使われないで残っているのが不思議です」と小十が言う。小十は土を少し分けてもらって「唐津に帰り早速試したい。森山さん、土をもう少し唐津に送ってもらえませんか、ご面倒掛けて申し訳ありません」

「辰口温泉でもう一泊していったら」と甚九郎に誘われても、その足で森山の車に乗り小松空港に向かった。こうして小十の夏休みは土と共に飛んで行ってしまった。

甚九郎と小十の最初の出会いは、一九八二（昭和五七）年五月、大阪堂島おおさかどうじまの画廊で小十の個展が開かれた時で、徳禅寺の橋和尚に誘われて画廊を訪ねた。画廊に入ると和尚がいつもの僧衣の出で立ちで待ち受けていた。和尚は、挨拶もそこそこにおもむろに言った

「小十さんは、一九一七（大正六）年唐津市のお生まれで、唐津の古窯跡を発掘調査して出土した陶片で唐津焼の研究をした人です。元々は関西の大学を卒業して、大手の生命保険会社のサラリーマンを経験しているのです。今の唐津の窯は古窯研究家の小山富士夫さんに小次郎窯と命名してもらい、そのご縁で志野焼きの荒川豊蔵さんも度々来窯され作陶されたそうです」

長身の体がかがめて傍そばで聞いていた小十は「ささやかですが どうぞご覧下さい」甚九郎は抹茶を頂きながら和尚の話聞いていたが、会場に入った時に目に入った茶碗が心穏やかにさせなかった。ようやく小十に促されその茶碗の前に立つて「斑まだらですね」と言った。

「はい、絵斑えまだら唐津茶碗からつちやわんです。なまこ色の斑が鉄絵を浮き立たせて曜変する様を表現しました。釉薬ゆうやくが流れ過ぎず、しっかり止まる温度が大事なのです。古唐津の陶片を参考に試行錯誤し、まだまだですが思った作品に近づいたと思います。今回、斑茶碗まだらちやわんはこの一点のみです」。甚九郎は「穏やかな作品ですね。是非これ取っておいってください」

小十は六五歳になっていた。社員なら定年を迎えている頃に一念発起して唐津焼の研究と作陶に取り組む様子に、甚九郎の小十を応援する気持ちが強くなった。

### 加賀唐津辰之口窯かがからつたつのくちかま

小十の個展があつてから半年過ぎた頃、「唐津へ行こう」と甚九郎からお誘いがあつた。今回は「唐津くんち」の見物と個展で求めた絵斑茶碗えまだらちやわんを受け取りに行く事

だった。同行者は白山の麓、一里野温泉高原ホテルの山崎正夫社長と私の二人。唐津の山手にある小次郎窯に直行して、作品を受け取り市内に戻った。

佐賀県唐津市の唐津神社の秋季例大祭である「唐津くんち」は、毎年一月二日から四日までの三日間開催される。街中を一四台の曳山が賑やかに練り歩く。途中で塗師の棟梁とも出会い話が弾んだ。そして今日の宿は呼子港の棧橋の目の前にある金丸旅館に予約を入れていた。

翌朝「朝食の準備ができました」との声に、用意された部屋へ行くとテーブルの上に、井鉢が並んでいるだけの殺風景な雰囲気だった。部屋を間違えたのかと思っていると、女将が薬缶と鯛の切り身を器に入れて持ってきた。醤油にお酒と味噌を加えた旅館オリジナルのたれに切り身をまぶして、ご飯にのせて上から熱いお茶を注ぐ。

「さあ、どうぞお召し上がりください」女将の声に、三人共「待っていました」とばかりに飛びつき、そして二杯目も平らげた時、テーブルの上に一合枘が置いてあることに気が付いた。その中には白身の魚の切り身と、奈良漬を昆布であえたものが入っている。女将は「海の御新香です」これもあつという間だった。

午前中は豊臣秀吉の朝鮮征伐の起点となった名護屋城跡をまわり、小十から昼食場所に指定された呼子の浜へ行くと、そこにもう一つの味覚が待っていた。砂浜に藁葺きと思われる平屋の小屋があった。恐る恐る近づいて見ると、そこが待ち合わせ場所の「河太郎」だった。

店の前に順番待ちのお客が一〇人位待っている。その行列を横目に玄関から入ると店の真ん中に大きな生簀があり、それを囲むように浜茶屋風の小上がりがあった。店員とお客の会話が弾んで満席の様子、店員は生簀から「たも」で魚をすくって調理場へ急ぐ、烏賊だ。

そこへ小十が、にこにこしながら入って来た。予約席に案内されて間もなく烏賊の生造りが運ばれてきた。ところが皿に盛ってある刺身の形がはつきりしない。刺身が透明でコリコリして程良い甘さもある。続いて天ぷら、いかしゅうまいと続く、小十も久し振りの様子で一同大いに盛り上がった。

このお祭と味覚の経験は、お供の二人にとって、その後の観光の取り組みに役立つ事となり、甚九郎の心使いに今でも忘れられない印象として残っている。

その後も甚九郎は何度も唐津を往復して小十と交流を深めることになった。

夏休みに誘ったのもその流れだった。土を持って帰った小十から「土は砂気が若干多いが、つなぎを工夫して焼いて二度窯出した作品は、どれも唐津焼に負けな  
い」と報告があった。

そこで、甚九郎は心を決めた。「折角に陶土も十分あり、小十も意欲を持っている。年に三、四回来て焼いてくれたら良いので登り窯を作ろう。森山も小十の手伝いをしながら唐津焼を修めればよい」早速に、辰口町の山間の金剛寺こんごうじに土地を手当し地元で懇意にしている建設会社に平屋の住居と作業場を、そして登り窯の造成は小十の知り合いに頼むことになった。登り窯の燃料は松材の薪が必要となり、当時、能登空港の開港に向けて工事が始まっており、滑走路に当たる松林の伐採で準備が出来た。

一九九八（平成一〇）年四月、京都大徳寺の管長 福富雪底ふくとみせつていの命名による「加賀唐津辰口窯」の開窯披露宴かいようひろうえんが行われた。

披露宴には大徳寺管長、辰口町町長はじめ開業にご尽力いただいた方々や、甚九郎の親しい友人など百名を超える皆様がお集まりになり辰口温泉「たがわ龍泉閣」にて賑やかに開催された。甚九郎の挨拶に続いて、小十は「今後、個展を開催して、早くブランドを確立させて、後継者の育成にも力を入れて行きたい」と八〇歳とは思えない勢いで挨拶をされた。

## 愛情の深さ

旅行の楽しみの一つにショッピングがあり、それぞれの買い方がある。イタリアのフィレンツェでの事だった、お客様を有名ブランドのブティックにご案内した。奥様がカバン、スカーフ等ご自分の品物を選んで会計となった時、ご主人が早速に旅行小切手を出して次ぎから次へとそれにサインを開始した。リズムカルに楽しん

でいるように感じられ、終わった時は満足気だった。その後、奥様はウキウキした様子で今買った品物を抱えて先にバスに戻られた。

今度はご主人が「ちよっと一緒に来て欲しい」と言って、近くの雑貨店に向った。余程気に入った品物を見つけたのだと思い一緒に店に入った。

そして、カウンター越しに指さしたのは皮のベルトだった。「これ一本下さい、いや二本にしようかな」と迷っている。見ると一本が確か日本円で千円程度だった。奥様の買い物はウン十万円、こちらは迷ってウン千円、この落差は何なのかを思いめぐらしながら、良い感じのベルトに見えたので私もつられて一本買ってしまった。愛情はお金で測ることは出来ないと言われるがこの出来事を奥様は知る由もない。

ナポリではこんな事もあった。カメオの工場見学の後、売店でショッピングを楽しんだ後、お客様の一人が近くの露店を冷やかし、カメオ工場の売店と同じ品物が安く売られていたので、「何故こんなに安いのか」と尋ねると、露天商は上手な日本語で「とって来た」、お客様がそれを買ったかどうかは定かではない。

## ニューヨークの出来事

冬のニューヨークは、三方が海に囲まれているので大変寒い。蒸気の配給管が地下に埋設されており、道路上のところどころにその白い蒸気が噴出して、この時季の風物詩となっている

一九九一（平成三）年 二月、セントラルパークの近く五番街にある宝石店の本店にいた。当時大変人気のあった銀のネックレスを、団体のお客様がお土産として買いたいと言われご案内した。当時この商品はなかなか手に入りやすく本店でも数を制限していた。

そこで、JTBニューヨーク支店からその宝石店に転じた旧知のA女史にお願いしようとして、宝飾店の社員通用口で嚴重なチェックを受け四階の外商部を訪ねた。A女史に会い用件を伝えると、しばらくして年配の男性社員が水色の小さな箱に白いリボンをかけた二〇個を、店頭からショッピングバッグに入れて持って来た。

「お客さん、日本に沢山のガールフレンドがいるのですね」とウインクした。

私は「はい」と大きな声で返事をしてA女史とお客様と一緒に大笑いとなった。それから宿泊しているヒルトンホテルに戻り、ホテルでの団体の夕食を済ませて部屋にいとリリーンとA女史から電話が入った。

「北河さん大変です。銀と金を間違えて包装したらしい。売り子とガードマンをホテルへ向かわせます」と慌てた声で電話が切れた。

お客様と部屋で待機していると、ピストルを腰に下げた映画から抜け出て来たようなガードマンと、泣きそうな顔をした女店員が部屋に入り、ベッドの上に広げた箱を一つずつチェックした。何と二〇個のうち一七個が金で、確か金が銀の一〇倍の値段だったので女店員の安堵の顔が忘れられない。

「もう少しで、ニューヨークのピアノバーの彼女にも渡すところだった」とA女史に電話でジョークを返した。宝飾店の売り場は日本人客で二重、三重の人垣が出来る程の盛況。その中の包装間違いだったようだ。

翌日は、フィナンシャルセンターにある北国銀行のニューヨーク出張所を訪ねた。

当時の安宅健樹あたくたてき所長（現・金沢商工会議所会頭）から米国の経済事情を親切にご説明頂いた後、隣のワールド・トレードセンターの一〇六階にあるレストランに向う。レストラン「ウインドーズ・オン・ザワールド」での昼食のためそのビルのエレベーター乗った。その時、ほぼ全員が「速いけど軽い感じがする、ビル全体が揺れているぞ、安普請でないかいや」と、ここでも金沢弁。団体の会社はエレベーターの設置も行っているのではなおさら真実味を感じた。

ニューヨークの街並みを見下ろしながらの食事が終わる頃、恰幅の良いウエイトレスが「こっちへ来い」とウインクして、私と腕組みをして店の奥へ私を引っ張った、私の身体が宙に浮いていたかもしれない。そして小さな窓から「自由の女神が見えるだろう」と頬を寄せてにっこり。ウエイトレスは食事が終わっての別れ際に、なんともいえない人懐っこい笑顔で団体を見送ってくれた。

それから一〇年後、二〇〇一（平成一三）年九月一日、この二つのビルに二機の旅客機が激突し多くの人が犠牲になり二つのビルは完全に倒壊してしまった。

世界を震撼させたテロが発生。団体の参加者はあの親切的なウエイトレスの笑顔やエレベーターの状況等から他人事ではないと思っっているはずだ。

## 「旅好きにつき無住所」を自称の町長

「北河君、今度の町長選挙に出る事にした」能登町の山瀬<sup>やませ</sup> 秀<sup>しげる</sup>からの電話だった。一九九一（平成三）年の雪解けの頃で、現役の町長に挑戦すると言う。

JTBの団体営業で知り合った当時から、関係する財団法人「若い根っこの会」の話を度々聞いていた。戦後、地方から集団就職で都会に出た若者が環境に馴染むようにお世話する会で、人のお世話を熱心にされる人だと感じていた。

選挙の結果は二五〇票程の僅差での当選となった。当初は現役との選挙は厳しいと聞いていたので正直びっくりしたが、それでも当選するのではと密かに思っていた。それは人の気持ちを大切にすることでは、人後に落ちないのを付き合いのある人は誰もが感じていることだった。

能都町では、毎年七月初旬に勇壮な行事「あばれ祭り」が行われる。お招きを受けて毎年女房とお邪魔する。能登地方の夏の祭りの始まりである。その能登町の海岸通りにある山瀬宅に、祭見物に県内外から多くの人が訪ねて来られる。そして皆様のお顔は楽しみにしている事がありありとわかる。

三間通<sup>みまとお</sup>しの広間で宴会、友人の漁業会社が今朝とつたばかりの魚を料理人が調理場で料理している。お酒は能登の地酒や、全国に名をはせている能登町出身の杜氏<sup>とうじ</sup>・農口尚彦<sup>のぐちなおひこ</sup>のお酒が並ぶ。そして入れ替わり立ち代わり人の交わりが波を打つ。当主は部屋の中程で、「刺身は、酒は」と大声で仕切っている。地元出身の国会議員や地方議員がご挨拶に顔を見せるが、一向にお構いなしで心はそこを訪ねた皆様の気持ちの中にある。

集団就職で都会に出た若者が、その後どうしているかを思いやる優しさが皆様に伝わり、参加者は毎年二百名を超える。それが高齢者に対する気持ちにも繋がっていると思う。それを感じたのは、能登町庁舎を訪ねると庁舎に入ったすぐの処に受付があり、何方<sup>どなた</sup>にも丁寧に対応し各課の表示も高齢者にも分かりやすく、雰囲気は民間の会社の様に明るく温かい。

能登町の山瀬町長が就任から暫くして、「町の海岸近くにある縄文時代の真脇まわき遺跡いせきを整備して、その周りに観光客用の宿泊施設や入浴施設を造ることになった。そこで、「誰かホテル経験者を紹介して欲しい」と連絡が来た。たまたま、大手ホテルチェーンで支配人をしていたM氏が頭に浮かんだ。

本人は金沢の東茶屋街で料亭を経営しているので訪ねて用向きを話すと、「三カ月位ならカルキュラムを作り従業員の教育をお手伝いします」と話してくれた。

出来上がった宿泊施設は名称を公募して「ポーレ・ポーレ」に決まった。アフリカ・ケニアのスワヒリ語で「ゆっくり 楽しく」を意味している。

オープンして間もなくの一九九六（平成八）年 九月、奥能登の珠洲市で「第一〇回全国豊かな海づくり大会」が開かれ、天皇・皇后両陛下（現 上皇・上皇后陛下）がお出ましになり、真脇遺跡をご見学された後、ポーレ・ポーレにお立ち寄りになられた際の御影と、ご案内する山瀬町長の緊張した面持ちの写真がお宅の居間に掲げられている。印象に残る行事だったのだと拝察している。

「ポーレ・ポーレ」に宿泊されたお客様には、町長みずからお礼の葉書をしたためお出しする、「時間のない時は、名簿を持参し出張先からも送る」と、ホテルの係員からお聞きした。そしてお客様からの紹介で予約を受ける事が度々あるとも話してくれた。

旅行会社では旅行の受付をした係員が「お帰りなさい」メールをお出しする事がある。私も会社では担当者に任せていたが、ある時広島に旅行されたお客様からクレームが入った。「宿泊した旅館の部屋の天井の蛍光灯が少し傾かしいでいた。老舗旅館に有るまじき事だ」。担当者に内容を確認かめて、早速お詫びにお伺いすると、郊外の豪壮なお宅だった。快く迎えて頂きお座敷でお抹茶まで頂いた。そして不覚にも今回の不手際をお詫びするのが後になる始末だった。

それから暫くしてご主人が「この葉書は何方が書いているのか」と葉書を出してお尋ねがあった。話の向きが違うのであわてて葉書を見ると、当社に入社一年未満の新社員の葉書だった。これは、てっきり別のクレームがあるのだと思みい身構みがまえ

た。すると「素朴に人の気持ちを癒してくれる素晴らしい葉書だ」とのお言葉に耳を疑った。ひよつとするとお褒めのお言葉ではないか。慌ててもう一度文面を確かめた。「旅先でお身体は大丈夫でしたか」等受け付けた担当者しか分からない高齢ご夫妻への気配りが記されていた。お客様の感激した面持おももちに接して人の気持ちを大切にすることを、改めて新入社員にも気付かされた。そしてこれが今回の本題だった。

また町長からはこんな事も聞かされた。「中央省庁に陳情に行くと、田舎の町長の持ち時間は少ない、そこでいただいた名刺を大切に帰庁してからお礼状を速達で出す」とのこと。これも一期一会、人との交流を大切にするアイデアで、丁寧な返事をいただくことが多いそうだ。又、町の人達との交流も、毎朝、庁舎へ出勤の前にご自分の軽乗用車で、町内を廻る計画をたてて実行し、道路の状況や田畑の作物の出来具合等について、その時にお会いする町民とのコミュニケーションを欠かさないと聞いている。

## 危機一髪

トルコ一周の観光を終え、イスタンブールからオリンピック航空で次の目的地ギリシャのアテネへ飛んだ。ロードス島の便に乗り換えるアテネ空港の待合室でベンチに座って書類を見ていると、「今日は、北河さんですね、ガイドのSです。今日から四日間私がご案内します」「よろしく、皆さん楽しみにしています」こんな挨拶から付き合いが始まった。

一九九一年（平成三）年一〇月、第四回目の「小堀ツアー」の添乗だった。

亜麻色あまいろの髪かみ、小麦色の肌、小柄で均整のとれたスタイル、一瞬、自分が外国映画の主人公になった様な気分がした。一時間あまりの飛行機内で、スケジュールを打合わせた。ギリシャ人の彼女は大学卒業後、ドイツ、フランスで語学の勉強をして、今はフランス人のガイドをしている二七歳。日本語の勉強もしているので、今回この団体のガイドを希望したとのことだった。決してこちらから尋ねたわけではないが、アテネのパートで一人暮らしたとも言った。

古代ギリシャ史に大変詳しいガイドで、ロードス島を隈なく案内してもらい、五つ星の「グランドホテル・アステアパレス」に入った。

翌日は小堀グループの「なにもしない日」に当たり、陽の光があふれるカフェテラスでの朝食後、思い思いのスタイルで過ごす。午前中は海岸散策、ショッピング、読書等。フリータイムとなつているので部屋に戻った。アテネを出発してから我々の他に日本人を見かけない。そういえば、フロントの両替所では日本円の換算率も表示されていない。こんなことから久し振りの外国旅行を団員は感じている。

昼食はプールサイドでのランチョンパーを予定していたので、部屋でその打合わせの電話を入れていた時、ドアのチャイムが鳴った。

「泳ぎませんか」深紅しんくの超ビキニ姿で片手に本を持ったガイドが立っている。

「ここからの」眺めはどうですか」と、言いながら部屋に入ってきた。外国女性の屈託ない明るさに慌てて電話を済ませた。部屋の中が甘酸っぱい香水の香りになった。危機一髪かと思いきや、彼女はすぐに踵きびすをかえして「先にプールへ行きます」と部屋を出て行ってしまった。

ロードス島で二泊した後、帰りはアテネまで一泊の航海だ。午後三時に出港、波静かなエーゲ海を船は進む。デッキから紺碧の海に映えるロードス島の家並が遠ざかっていく、今夜は波を枕に休むとしよう。

## 平安の舟遊び

「京都の嵐山吉兆で花見の会があるので、行かないか」と甚九郎からお誘いを受けた。

四月ははじめの嵐山の桜も満開、夕方五時ごろに吉兆の前の船着場から屋形船で保津川を一五分ほど上り、ゆっくり吉兆特製のおつまみで酒を酌み交わしていた。

辺りは深山幽谷しんざんゆうこくの雰囲気、暫くすると薄暮はくぼの中を一艘の舟が笛の音とともに近づいて来る。良く見ると、何度か他の場所でもお会いした先斗町の芸妓による

「一調一管いちちよういちかん（笛と鼓）」の調べであった。

その瞬間、タイムスリップして平安時代に紫式部を見出したあの藤原道長が楽しんだ舟遊びは、こんな風情だったのかと今でも不思議な感覚になったのを覚えている。六時から吉兆のお座敷で花の宴が始まった。部屋は行燈のあかりが灯り、着席すると接待さんが静々と順番に高御膳をささげ持って入って来る。ふと見ると高御膳の料理に添えてお花が生けられている。その花は各人それぞれ種類が違っており、行燈のあかりにとでも映えている。花の宴にふさわしい心憎い演出だ。屋形船の時と同じ感覚で芸妓がさらに花を添えてくれる。甚九郎は場を楽しく過ごす名人で今夜も主人公だった。

秋には、京都の高雄を流れる清滝川きよたきがわのほとりにある吉兆の別荘での「紅葉の茶会」にも何度かご一緒した。ある時の茶会では、滅多にお目にかかれない北大路きたおおじ魯山人ろさんじんの器づくしで行われ、魯山人が吉兆で使う為だけの器を作られたとお聞きした。

## 小説のモデル

嵐山吉兆の会長・徳岡孝二とくおかこうじと甚九郎は仲良しで、五月のはじめの山菜の時期に鶴来の奥、手取川ダム近くの甚九郎の持ち山で岩魚と山菜を御馳走するとお誘いした。吉兆徳岡は背広姿、同行者の徳禅寺の橘和尚はいつもの僧衣、真珠庵の山田和尚は登山姿でそれぞれの性格をうかがわせる。

岩魚は山を管理している職人が朝から川に入り獲ったもの。山菜は山でタラの芽など手を伸ばすと採れる、甚九郎の自慢は、あざみと煮干しを味噌汁にしたものだ。そのにおいを嗅ぎつけて、カモシカまでが様子を見に来る。

又、秋に能登の知り合いの松茸山に誘った時は、伊賀上野の「金谷」かなやの肉を前日にわざわざJRで買いに行つて準備した。その肉は小説家・丸谷才一まるやさいいちから知る人ぞ知る肉があると紹介されて、美味しいので病みつきになった肉だった。専用牧場で育てた子牛の雌の肉を使用していると聞いている。

当日は松茸のすき焼きで吉兆徳岡が料理担当、食べる担当は徳禅寺の橘和尚を先頭に一二名、

大きな二つの鍋の中は松茸が山盛りで橘和尚が、「肉を探すのに苦勞した」と贅沢を言う。参加者全員が吉兆のご主人の手料理だと大変喜んで盛会の内に終了した。その丸谷才一が、晩年に昭和天皇を手術された医師と同じ腕を持つと言われる医者がある、金沢大学付属病院に入院したことがあり、その時、甚九郎は奥さん替わりの様に毎日病院を訪ねて、病院食を食べない美食家の希望を聞いて、仲良しの日本一ともいわれる寿し職人「小松弥助」のお店で、大好物のいなり寿司等を見繕って持って行った。

丸谷才一の小説「女ざかり」に甚九郎が終戦直後に経験したエピソードが掲載されている。終戦の直前、焼野原になった銀座で五千坪の地面が坪一円で売りに出ている場面、まだ学生の身分で実家にその土地を買うお金を頼もうとしたが、母親を驚かせるとまずいと躊躇ちゅうちゅうした。「あれを買っていると今頃は」と話すのを聞いて小説に組み込んだそうだ。

本人の役は酒屋の長男で富山県二区選出の代議士、田丸総理大臣として登場、女優と恋仲になる等フィクションではあるが、結構「女ざかり」では持て男になっている。現実には私の知る限りでは紳士でグルメ。書くにあたって何度も丸谷才一から打合わせに連絡が来たと言う。

## アスワンの母娘

アスワン・ハイダムが造られ、ナイル河がせき止められて出来たナセル湖に、水没する危機にさらされたアブシンベル大神殿が、ユネスコの協力で高台に移築された。その大神殿のラムセス二世の足元に到着した。

一九九五（平成七）年二月、第八回「小堀ツアー」の一行二六名だった。

ビデオカメラを回しながら、神殿内部に向かって歩き出したとき、カメラに別の日本人旅行客が映った。母娘らしくジーンズに白シャツ姿の娘さんがこちらにカメラを向け撮影している。母親は四〇歳半ばぐらいだろうか、黄色と白色模様のブラウスと、白のスラックス姿で、にこにこしながら娘さんに話しかけている。お互いビデオカメラの対面となったので、カメラの視界を外して軽く会釈した。

それから、神殿の見学を終えた一行は、アスワン市内のナイル河を見下ろす「カタラクトホテル」に入った。ホテルの大食堂は、一九世紀に建てられたままで、天井が高く教会のドームを思わせる荘厳な雰囲気を漂わせている。ほの暗い中、キャンドルが各テーブルに置かれ、色とりどりの装いの欧米人が楽しそうに食事をしている。

団員は八時からの夕食に、これまたお洒落して集まった。席を案内していると奥の方のテーブルで見覚えのある日本人がこちらの方に向かって会釈した。先程の母娘でドレスアップして見違えるほどで、そのキャンドル越の雰囲気はアガサ・クリステイーの小説「ナイル河殺人事件」の映画の一シーンを観ているようだ。ちなみにアガサ・クリステイーが、映画撮影の際に宿泊した部屋も残されている。

翌朝、ナイル河を見下ろすロビー横のテラスで、ガイドと打ち合わせをしていた時、あの母娘と「おはようございます」と、挨拶をかわした。言葉の不自由もなく、欧米人並みに個人で海外旅行を楽しむ時代になったことは旅行者として誇らしく思えた。その立ち居振る舞いに、目が留まったのは私だけではなかった。

「何となく気になる日本人がいた」と後で団員に話したところ、「素敵なお二人は私達も気づいていましたよ」と奥様方が口々に語ってくれた。何処の誰とも名乗ったわけでもないが、品のある印象鮮やかなお二人だった。

さて、一行はアスワンの後に次の訪問地ルクソールに向かった。ナイル河を挟んだルクソールの町は紀元前エジプトの首都だったところ。東岸のカルナック神殿や西岸のツタンカーメン王の墓のある王家の谷の観光を終え、ナイル河の中州クロコダイル島にある五つ星ホテル「モーベンピックホテル」に入った。旅装を解いた各コテージの周りには、芝生が敷きつめられ色とりどりの花がここかしこに咲いている。

夕刻七時、夕食のレストランに向かって芝生を横切った時、丁度ナイル河に夕陽が沈もうとしているところだった。黄昏の雰囲気の中、静かに音楽が流れプールサイドの背の低い木々の間から見える船着き場に、ファルーカ（小さな帆船）が帆をおろしながら帰って来る。夕陽のオレンジ色が、向こう岸のヤシの木々を黒く染めながら最後の輝きを見せている。旅人はプールサイドの植え込みに囲まれたカフェテラスで、静かにサンセットを楽しんでいた。

翌日、午前一〇時に馬車七頭でホテルを出発、コーランのお祈りが聞こえるナイル河沿いの田舎道を、蹄ひづりや鈴の音を響かせながら進む。先頭から振り返ると各馬車のご夫婦が子供の様にはしゃいでいる。御者になったつもりで掛け声も掛かる。ルクソール博物館を見学の後、市場に入り馬車を降りて少し歩くことにした。活気ある市場の雰囲気は、我々を三千年前の古代エジプトに、タイムスリップをさせてくれた。

## 旅の品格

毎年、元日の夜にオーストリアのウィーンフィルハーモニー管弦楽団演奏の「ニューイヤールコンサート」が日本のテレビで放映される。その舞台となっている「ウィーン楽友協会」のゴールデンホールと呼ばれる演奏会場に入ったのは秋が深まった頃だった。

「小堀ツアー」の総勢一八名の席は、テレビのコンサートでよく映る上等席で着飾った人たちの間を通り団員を席にご案内した。周りは殆んど地元ウィーンの人達と思われたが、暫くして団員がその雰囲気にとびつたりおさまっているのに気が付いた。

甚九郎は自宅に大きなオーディオ装置を設けて、クラシック音楽、特にモーツァルトの大ファンであることを団員はあまり知らない。それをひけらかすことなく談笑しながら開演を待つ様子は、和やかな雰囲気なごを醸し出して周りをリードしている。今回のメンバーは甚九郎夫婦、他に建設資材卸、みそ醸造業、自動車修理工場や住宅建設の経営者夫妻や電気会社の役員等で、「明日はもう駄目か、何度も女房と抱き合って泣いた」と、言う人もいる市中の猛者の集まりで、何事にも動じない肝っ玉の持ち主ばかり。休憩時間に二階のロビーで一服していると、他の日本人団体の女性添乗員が話しかけてきた。

「一階席の団体の添乗員の方ですね、どちらから、どんな団体なのですか、入って来られた時から後ろの方で拝見していました、素敵な皆さんですね」と嬉しいことを言ってくれる。当時は海外パック旅行が盛んで、ゆっくり楽しむ旅はまだ先だろうと思われていた頃で、その添乗員は驚いた様子だった。

今回、メンバーの航空機は往復ビジネスクラス、ホテルは楽友協会に近いANA グランドホテルを手配していた。人生のアップダウンをかみしめた人たちの堂々たる、そして品のある姿が傍目はためにも誇らしく思えたのかも知れない。残念だったのは彼女の目が「添乗員はいま一つですぬ」と言っていることだった。

「旅の品格」は旅人の人生経験と自信から自然体で事に対処する。旅に持参した書物を機内や車中、ホテルで読む場面をよく目にする。このリズムは日常と変わらない。そして非日常の風景、美術、音楽を楽しむ。味覚、歴史等を楽しむ。これが旅の醍醐味でもあるのだ。

但し、団長の部屋へお邪魔すると「お前の土産の荷物が多くてスーツケースが締まらんがいや」等と金沢弁でやりあっている場面に出くわす事がある。これについては日常、または非日常の出来事なのか判断出来ないでいる。

## キーウエストの神風

「幹部社員を対象に海外研修旅行を考えている」。金沢市に本社があるH社の清水正行しみずまさゆき常務からの電話だった。

「ニューヨークで開催される見本市を見学して、電気設備の研修に日本人のあまり知らないリゾート地のホテルを組み込んで欲しい」。常務とは三〇年来のお付き合いで、日頃から斬新な考えを持っている人だと思っていた。

一九八九（平成元）年一月、ニューヨークで見本市視察を終えた一行は、一路アメリカ東海岸を下りてフロリダ半島のマイアミに到着。バスでセブンマイルブリッジを通り、北米大陸の最南端キーウエストに入った。

ここは作家のアーネストヘミングウェイの作品「老人と海」の舞台となったところだ。住んでいた家や、良く通ったバー「スロッピージョーズ」も現存していて観光客の人気を集めている。

知り合いのステューワーズから聞いた話では、オーストラリアのパス、エーゲ海のロードス島、そしてここフロリダ半島のキーウエストがステューワーズの人気場所とか、いずれも南国のきらめく陽光と、夜はセクシーなくらい魅惑的な雰囲気は共通している。勿論、私も大好きな所だ。

夕食は「九州」という名のお寿司屋に予約を入れていた。日本ではお目にかかれな  
い大きなマグロの握りなどを堪能<sup>たんのう</sup>、遅くまで南国の夜を楽しんだ。

翌朝、「カーサ・マリーナホテル」のテラスでの朝食を終え、手荷物を持って席を  
立った時、隣のテーブルで食事をしていたアメリカ人の老夫婦のご主人が、両手を  
広げて、肩をすくめて「オー・カミカゼ」とニヤリとした。

男性一六名、何となくねずみ色、全米一といわれる避寒のリゾートで一泊、そ  
して何もしないで出発。前日、ホテルのバックヤードで電気設備の研修を行ってい  
た事を老夫妻は知る由もないが、それにしてもちよつと無粋だったと反省。これか  
ら向かうアリゾナ州のフェニックスでは少しゆっくり時間を取る事にした。

ツアーの一〇日間、戦前、戦中派の役員や部長である団員はカルチャーショック  
を受けたようだ。帰国して各人の研修レポートを読んだ清水常務は「意識改革の一  
助になった様で、会議でも積極的な発言が目立つ」と語ってくれた。

テレビでは、衛星放送が毎日のようにニューヨークの証券取引所や、ワシントン  
のホワイトハウスからニュースを送り続けている。それを現地で直接肌感じて来  
た団員の臨場感は、自分も激動する世界の中にいると実感しているに違いない。

その後、社員旅行も実施し海外へ出かけている。「話題が豊富になり、物怖じしな  
い」と営業にも効果が上がっているようで、こちらもほっと胸を撫でおろしている。

### 釣魚台迎賓館<sup>ちようぎょたいげいひんかん</sup>

長野県の本曾平沢の漆芸家・夏目有彦<sup>なつめありひこ</sup>から甚九郎に電話がきた。

「松本市の古美術商と北京行き予定があるので一緒にどうですか」との誘いだっ  
た。夏目有彦は京都の徳禅寺の橘宗義和尚の友人で、そのご紹介を受け甚九郎も何  
度か本曾平沢にある工房を訪ねていた。

松本の古美術商は北京で中華料理店も経営しており、その顧客の中に中国の国会  
にあたる全人代の関係者がいて、釣魚台迎賓館での宿泊と北京故宮博物院のバック  
ヤードの見学をお世話するとの事だった。

一九九八（平成一〇）年二月、第一一回目の「小堀ツアー」は夫婦六組と女性二人に、添乗員夫婦の一六名、北京、香港六日間となった。「今回はめつたにない機会だから、添乗員の添乗員も同行させたらどうか」と誘われ、妻は友人との「へそくり」参加となった。

小堀家では、自宅のお茶室で月窯つきかまが開かれている。甚九郎の誕生日が九月九日の「重陽ちやうようの節句せっきう」にあたり、鶴来町で醸造されるお酒は「加賀の菊酒」がブランド名の事もあり、それに因ちなんで月窯を毎月九日に決めている。

「お茶の茶碗は、それでお茶をいただいてこそ喜び、茶碗の魅力も増してくるので皆様に協力してほしい」これが月窯の目的となっている。

午後二時から開かれ、小堀グループの団員やゲストも招かれる。肩肘はらない和気藹々の雰囲気が好きで、私と妻も時間の都合を付けて出来る限りお伺いする様になっている。茶碗は小十や森山の作品のほか、交流のある対馬つしまの小林東吾こばやしとうごの作品など、季節毎の茶碗で各人二服いただくので数多く拝見出来る。

小堀家のご親戚の遠州流のお茶人で、金沢学院大学の平木孝志教授ひらきたかしから、本人は日本画家でもあるので茶器や掛け軸などの詳しい説明を受けるのが楽しみの一つ。毎回お菓子が秀逸しゆいつで、主に金沢市東山の吉よしはし製が供される。時にはその日の午前中に京都の名店「麩ふうか」の麩饅頭ふまんじゆうを、JRで出かけて買って来て間に合わせる芸当もする。甚九郎の人の喜ぶ顔が見たいとの一心がそうさせる。

さて今回の旅は、小松空港から羽田空港乗り継ぎで北京空港に着いた。北京の二月は、雪は多くないが刺すような寒さで吐く息も白い。皆さんはオーバーコートにマフラフラー、手袋の完全装備をしている。

北京にある釣魚台迎賓館は、各国の首相や大統領をもてなす迎賓館で、当時は観光客が宿泊出来る場所では無かった。大きな敷地の中には、いくつもの宿泊施設があり、テレビでよく見る会見場の、その一つのレストランで夕食となった。

レストランの中央に、丸い大きなテーブルがあり、その真ん中に飾り花とキャンドルが華やかさを醸かしている。部屋の周りには、いずれも背が高く美人のウエートレスが一〇人程控えている。

宴うたげは甚九郎の乾杯で始まり、最初の緊張も解けて思い思いに箸も進み、食事と同時に完璧なサービスが始まる。私もJTB時代に三年間JTB運営のホテルに出向したことがあり、その時の経験が懐かしく思い出された。

誰かが「このワイン美味しい」と言った。「ダイナスティ」と読めた。中国産の赤ワインで格別の料理に合っていると満足を口にする。ここは中国なのかと見紛みまごうばかりの雰囲気だった。

翌日、宿泊費の清算をと、いつもの様にフロントを探したが何処にも見当らない。そうだ迎賓館に泊まったのだと気が付き、連絡するとロビーで待つように指示された。しばらくして、アタッシュケースを提げた事務員風の男性が現れロビーのテーブルの上で清算が始まり、書類はすべて手描きで米ドル払い、終始無言で手際よく紙幣を勘定して静かに去っていった。殆んど外国の首脳がお客だと聞いていたのでフロントもキャッシャーも必要ない。宿泊翌日に現金決済などは稀まれな出来事だったようだ。朝食後、団員それぞれが庭を散策した、「この建物がアメリカの大統領、向こうがイギリスの首相の宿泊所だった」などと関係者の案内で楽しんだ、

そして今回の旅のもう一つの目的、北京故宮博物院のバックヤードで開催される所蔵品のオークションを見学するため、迎えのバスに乗り迎賓館を後にした。バスはゆっくり出発したが、いつもの故宮の正面の見学入口ではなく、ユーナをまわり左横手に向かい衛兵が警備する門から入った。門の両側には衛兵が銃をささげて立っており、バスが近づくと門を開き中に入ることを指示した。そこには、レンガ造りの頑丈な平屋の建物があり、その前で待たされた。

厳寒げんかんの北京だったが、これから何が始まるのか、期待する気持ちで待っていると玄関の黒い鉄の扉が開いた。部屋の中には、重厚なテーブルが置いてあり、その上に骨董品と思しき物おぼが並べられている。その周りを欧米人が囲み、掛け声をかける人や、品物を指さす人の熱気で一杯になっている。

故宮博物院では、中国各地から発掘品や伝世品が集められて収蔵展示される。すでに収蔵されている品物やB級品は、欧米に向けてオークションで販売するのだと聞かされた。唐時代の女人俑にょにんようや吉州窯きつしゅうようの器など次々と展示され、終始手慣れた作業だった。同行した古美術商は元気な声でその輪の中に入っている。

その後、故宫を離れて美術商の経営する北京料理店で特級料理人の昼食だった。北京ダックも勿論おいしいが、餡色にしつかり味のしみた大振りのラッキョウが美味しくて、もう一度口にしたいと今でも時々話に出る。一つの美味しい味で後を引きかせる、これが中国流のおもてなしなのかも知れない。

### 検事長余話

「京都南座の近く花吉兆はなきちょうで猪鹿鳥いのしかちょうの集まりがあるので行くぞ、大阪からも一人お呼びしている」「大阪からは何方ですか」「元大阪高検検事長の中尾なかお 巧たくみさん」。鶴来町で桐工芸「町八家具まちはちかぐ」を経営している町社長が「小堀さんは我々の行きにくい所へよく行つとるね」と話していた事がある。

甚九郎が金沢の家庭裁判所の調停員をされていて、ご一行の旅行をお世話させて頂いて裁判所との関わりは存じていたが、まさか、あの高等検察庁のOBが知人と聞いてびっくり、当日は緊張して金沢から特急サンダーバードに乗り京都に向かった。京都駅の正面改札に向かつて階段を下りていると、改札口で身を乗り出してこちらに向けて盛んに手を振っている方がいる。「あの方は」「ああ、中尾さんだ」。待つてくださいますよ、「元高検検事長が」頭の中が整理出来ないまま改札を通った。

駅直結のホテルのコーヒーションショップでご挨拶させていただいた。元検事長は現在大阪で弁護士をされている事や、旅行を楽しんでいる事等、当方が緊張している様子を見て和やかな雰囲気ですべて接してくれた。

京都南座の近く花吉兆はなきちょうでは、猪鹿鳥いのしかちょうの料理で、鳥は青首あおくびの鴨かもが準備され賑やかに始まった。吉兆の徳岡会長、徳禅寺橋和尚、八つ橋の老舗西尾の女社長など二〇人程と元検事長は愉快に輪に入って楽しんでいた。

後日、甚九郎経由で頂いたご本人のエッセイ集「検事長余話」を読ませて頂くと二〇〇八（平成二〇）年 五月、名古屋高検検事長時代に名古屋ドームで開催されたプロ野球の公式戦の始球式を行ったとある。当時、裁判員制度の広報を名古屋ドームが協力することで検事長の登板となり、高校球児でもあった検事長は張り切って部下を相手に練習して臨んだ。

当日「ボールは、外角の高めに浮いてしまったがミットにダイレクトに収まった。バシツという鈍い音がドームにこだまし、」と投球ホームの写真と共に綴られている。

ところで、私の父も戦前、東京蒲田の日立製作所に勤務していて、職場の野球チームでピッチャーとして試合に出場していたが、身体を壊し昭和二〇年私が三歳の時に亡くなり。母は一年後に金沢で病没。そんな事から祖父は一切野球の話はしなかった。野球をしたいとせがんでも、野球帽を買ってくれたのが精一杯だった。

そこでJTBに入社後、暫くして野球チームを作り、監督兼ピッチャーとして営業先の銀行等のチームと試合をした。

そんな中、和倉温泉、加賀屋かがやの野球チームと対戦した事を思い出す。当日、七尾市の野球場に到着して周りを見て緊張した。相手チームはユニフォームも着慣れた風で勢揃いしていて、公式審判員と思われる人も準備されている。

そして試合が始まったがいつもと勝手が違う。ピッチャーで登板したが、本格的なマウンドで球は高めに浮いていた。それでも何球かはミットに収まったが、無観客でも緊張で思う様に投げられなかった。加賀屋のチームには、能登地区の高校球児が何人も入社し野球部に入っていると、試合が終わってから聞かされ、どうりで試合にならない訳だと納得した。

さて検事長は名古屋ドームで三万人の観客が見守る中で直球勝負したのは、並大抵の肝っ玉ではないと思う。又、趣味は水彩画で「検事長余話」の表紙や挿絵も鮮やかな色彩で描かれている。私も時には絵筆を持つ事があるが、元検事長の腕前は「プロはだし」と思われる。

京都から帰って間もなく小堀宅にお邪魔して、甚九郎は不在でしたが、孝子夫人に中尾検事長の話をすると、「存じています、本当に素敵な方ですよ。金沢地検検事正の頃にお見えになりました」と懐かしく思い出すように印象を話してくれた。間違いなく柔剛併せ持つ人物で、ご夫妻で旅を楽しむ等、愛妻家でもある様だ。

## ベトナムの経済事情視察

一九九四（平成六）年に関西空港とベトナム・ホーチミン空港の間に、新しい航空路線が開設されたので、ベトナムツアーのセールスを開始した。そして半年後に北陸ミサワホームの林社長を団長に経済視察を目的とした団体が、一九九五（平成七）年一月、日航機で出発した。

翌日、ホーチミン市の商工会議所に出向き、二時間余り懇談する機会を得た。日越両国旗がテーブルに向かい合って並んだ会議室で待機すること数分、フランス風の洒落た建物の中央にある階段からゆっくり降りて来られたのは、上品な薄いピンク色のアオザイをまとった初老のご婦人だった。通訳はその婦人の姿が見えると姿勢を正し、おもむろに「総裁です」と言った。総裁は席に着く前に、視察団の側に歩み寄り、名刺の交換から始まる。

会議は視察団側の質問で終始したが、総裁には、一つひとつ丁寧に答え頂き予定時間を超える熱を帯びた会議となった。帰り際に商工会議所の玄関での記念撮影で無事終了したが、通訳から総裁はベトコンの戦士だったと聞かされ団員一同吃驚びっくらした。

ホーチミンは、今が乾季で日中の気温は摂氏二五度前後で、カラッと過ぎしやすい気候で、今回はホーチミン郊外のマングローブが見事なメコン川デルタ地帯をひねもす船で廻った。

川中の小島に上陸、風通しの良いロジ風の食堂で休憩した折に目にしたことのない果物が出された。ミルクアップルと呼ばれ、色は青リングに似て形は丸い小さなウリ程で、柔らかい肌触りを持っている。誰かが乙女の乳房の様だといった。出されたスプーンで果肉をすくうと、白いミルクが一緒に口の中に入り何ともいえない上品な甘い味がした。

「念力をかけんでも、スプーンが曲がったがいや」団長の金沢弁。

市内の道路は日本製のバイクや自転車があふれ、その間を自動車クラクションを鳴らし続けて走る。信号もあまり見当たらず、それでいて渋滞も少ない。五日間の滞在中に交通事故はおろか、バイク同士の接触さえもお目にかからなかった。

団員の中に自動車学校の役員がいて、旅の終わりごろには頭の中がパニックとなった様子だった。皆に向かつて曰く「自動車教習とは、交通信号とは」。

ベトナムの人々の戦禍があった事を我々に感じさせない元気な姿に接し、全員が「清々しい気持ちにさせられた旅」と好評だった。帰国してから数日後、ベトナムとの交流を深める目的で、団長を中心に「北陸ベトナム友好協会」設立の発会式が金沢のホテルで行われた。

### 「J C 少年の翼」と動物漫才

一九七八（昭和五三）年八月、日中平和友好条約が締結されたのに呼応して観光を含めた視察団が堰<sup>せき</sup>を切ったように登場してきた。

北陸のある地区のJ C（日本青年会議所）が青少年の国際交流を目的として、地区の中学生を対象に中国へ「少年の翼」を計画、JTB高岡支店がその旅行を担当。大型団体になると旅行を円滑に運ぶために先行下見が必要になる事がある。

一九八五（昭和六〇）年八月、本隊一五三名が全日空のチャーター便で日本を出発する五日前に、私は北京に向け出発した。その後、中国の北部にある瀋陽市（旧奉天）に入り、中国国際旅行社瀋陽分社の担当者と落ち合った。

今回のメインイベントは、瀋陽市の工人体育館での日中友好運動会と、その後の少年宮でのキャンプファイヤー交歓会なので受け入れ状況を入念に確認した。

翌日、日本からの本隊を迎えるため、大連に向けて列車に乗り込んだ。この路線は旧満鉄の線路を利用しており、食堂車が付いていないとのことで、ホテルで用意してもらったボックスランチを持ち込んだ。その中身は、ゆで卵、食パン、鶏のから揚げ、スライスハムと果物だった。

しばらくして同行の担当者と弁当を開いていると車内放送が始まった。二人の男性の賑やかな掛け合いが流れ、時折ニワトリや犬の鳴き声など動物の真似をする。そして乗客が一斉に笑い出す。私も釣られて笑っていると、担当者は「これは中国の漫才です」と言った。その楽しい笑い声を聞いていると、ラジオにかじりついてエンタツ、アチャコの漫才に聞き入っていた懐かしい時代が思い出されてなぜか新鮮な、そしてほのぼのとした気持ちになり、今までにない美味しい昼弁当となった。

久し振りの真夏の大连は。木々の緑が澄み切った青空に映え、すっきりした大陸性気候で迎えてくれる。半日の余裕が取れたので、港の見える高台のホテルから車で街に出て、戦前の日本人街や、中山広場の大連賓館（旧満鉄が経営していた旧大連ヤマトホテル）に立ち寄り大連港に向かった。

港の案内所で連絡船の時刻表を手に入れた。ここから南の天津港や青島港への船の便数は多くなっており。人や荷物の往来が盛んになっている。

本隊は北京空港で中国軍の軍用輸送機二機に分乗して大連空港に到着。緑褐色の軍用機利用は中国国際旅行社の担当者も寝耳に水の状況で、「旅客機の都合」の一点張り。社会主義国の一端が垣間見えた。旅行日程は地区J.Cの皆様と、三人の添乗員で順調に進んでいった。特に、瀋陽市での日中友好運動会は当日二千人の少年少女が集い、日本から持参した大玉ころがし、棒たおし、玉入れなどで大変盛り上がった。

最終日の北京の天安門広場での全員集合写真では「J.C少年の翼」の横断幕の前に全員が元気な姿で勢揃いしている。旅行の計画段階からJ.Cの皆様のチームワーク、旅行中の子供達への、あの献身的なお世話など、旅行業者として見習うべき事が多くあり、J.Cの皆様のご協力と応援のお蔭で無事終了することが出来た。

### 自由行動日

パック旅行や団体旅行の日程によく「自由行動日」が設けられていて、お仕着せの旅ではなく、お客様にお好みの味付けをしてもらおうとしている。

イタリアのミラノで一日自由行動日となった時、あるご夫婦から昨日観光したミラノ市内にある「サンタマリア・デレ・グラツイエ教会」にもう一度行きたいと注文があった。

そこは、レオナルド・ダビンチの「最後の晩餐」の壁画があることで有名な場所。たまたま、そこで販売していたその壁画の小さな印刷画を、私がお客様にお土産にとお勧めしてそれを買い忘れたと言う。自由行動日にはこんな効用もあったのだ。

その後ホテルに戻った時、今度は女性グループから「是非本場のピザを味わいたい」と希望が出た。「旦那さんと一緒にではないのですか」とは聞けない雰囲気だった。早速ホテルのフロントに確かめると「この近くにある」という。

「昼近くになっているので、たぶん開いているだろう」とのことで歩きながら探すことにした。

ミラノ駅前のホテルから道路沿いのいたるところに、小さな公園があり犬を散歩させている人に出会う。バスで観光するミラノとは違った趣が感じられる。ほどなくして、お昼時の開店準備に忙しいレストラン街の一角に目当てのピザ屋が見つかった。

典型的なイタリアーノのご夫妻が経営している約一五坪くらいの小さなお店で店の前のテラスに席を取り早速ピザを注文した。店主の話では、日本の雑誌社の取材を受けて、本で紹介され日本人客も時々訪れるとのこと。大判でふくよかな味のピザは女性陣の評判となった。

手元に店主ご夫妻を真ん中にテーブルを囲んだ当時の写真がある。旅の途中で何かから解き放たれた様な奥様方の笑顔が印象的だ。帰国してから、あの壁画が、買いたれたお宅の居間に飾られているのを拝見して、楽しんでおられる様子にほっとした。

### ロードサイド店

イギリス・ロンドンのケンジントン地区に、新しい旅行のデパートが開店した。

旅行業界誌にその紹介記事が掲載されたのは、スペインのバルセロナオリンピック開催の四年前の一九八八（昭和六三）年だった。

翌年、私はオリンピックの関連施設見学を目的としたヨーロッパ視察旅行に参加した。最初の到着地JTBロンドン支店で現地スタッフと打合せの後、以前に富山県のJTB高岡支店で同僚だったH社員とそのデパートに向かった。

そのHが高岡支店からロンドン支店に赴任したにはこんな経緯があった。

ある日、事務所で「本社が募集している海外短期留学制度に応募したい」と相談

があった。Hは支店の団体営業で主力だったので躊躇ちゆうちゆうしたが本人は大学在学中から、卒業後海外で活躍したいとの思いから語学に力を入れていた。外国人の観光ガイド等も経験。語学は堪能で短期なら本人の為にもなると受験を勧めた。本人は喜び勇んで本社で面接試験を受けたが、結果は不合格で私は内心ほっとした。

帰って来た本人から意外な言葉、「短期は駄目だが、海外赴任ならどうか」と打診されたと言うのだ。本人は何とかこのチャンスを活かしたい、当初の目的と違うが認めてほしいと必死の思いが伝わってきた。

そこで「Hは、時々、英語か日本語か 判別しにくい字体で書類を書いている。この際、はっきりさせた方が良くはないかと思う」と、誠にあやふやな理屈で支店長に具申したと思う。

そして当時ロンドンへ赴任して三年目に入り間もなく日本に戻る頃合いだった。ところがその後暫くして、本人がJTBロンドン支店長に抜擢され、「瓢箪から駒が出た」と驚いた。

日本の従来の旅行店舗は、駅前か繁華街の立地が多く、店舗スペースや駐車場が充分取れなかった。そのロンドンのデパートは、フランスのタイヤメーカー「ミシュラン」のビルをイギリス人のオーナーが買い取り、旅行を生活の一部ととらえたコンセプトでオープンした新しい試みだった。

一階は旅行商品販売フロアー、二階は家具・リビングフロアー、三階は食品・キッチン用品で、旅行フロアー以外の商品は、全世界にバイヤーを派遣して品揃えした雰囲気のある店舗で、訪れた日は若い人達で大変賑わっていて、じっくりと見学させてもらった。

その後、視察旅行はスペインに入り、グラナダ、トレモリノス、セベリアを回り目的地バルセロナに着いた。オリンピック競技場などの施設の進捗状況を現地の担当者から説明を受け、一〇日間の全日程を終了した。

ロンドンのデパートの印象が強烈で、視察のまとめは二の次となり、帰国後、早速ロードサイド店を開設させようと立地の検討に入った。幸い地元のホンダ系列の自動車販売店の山野吉彦社長のご協力をいただき、その本店の隣に土地を確保する目安がついた。

ところが本社にお伺いを立てるも、なかなか色よい返事が返ってこない。本社の担当者が現地調査に来て、当方が提出した資料を見ながら、「北陸自動車道の金沢西インターチェンジに近い場所で、確かに車は通るが人は歩いていない。ここではお客が来ない」とつぶやく始末。「渋谷のスクランブル交差点の人混みは、地方では郊外の交差点の車混みです」と反論した。

その後、暫くして「東京近郊の都市の郊外のショッピングセンター内の旅行店舗の売り上げが伸びている。金沢の物件を再度検討する」と連絡が入った。

一九八九（平成元）年 七月、「金沢西インター旅行サービス店」開設。

オープニングの挨拶は、本社に着任して間もない国澤潤三常務役員だった。私が名古屋のJTB運営ホテルに向向時、国澤常務は何度か名古屋のホテルに来られて食事を一緒にさせて頂いた事がある。

「この店は、全国では丁度二百店目に当たる。地元の北河君が思いのまま造った店だが、みんなで協力して頑張ってほしい」。

旅行販売の他に、スーツケースなど旅行用品や輸入雑貨を取り扱う店舗となった。店の雰囲気も大切と考えてフロリダ半島を添乗中に利用した銀行の、材木を主題にした店舗を思い出して地元の若い設計士に依頼した。

一年後には軌道に乗り、車で乗り入れ出来る店舗としてハネムーンのお申込みや年配の方の旅行用品販売等で賑わった。全国初の複合旅行ロードサイド店として業界紙に紹介もされ、多くの方のご協力で歩き出した。

## 添乗の間合い

手元に一枚の写真があり、集合写真の左端に私が程良い間隔で立っている。この時はヨーロッパへの中継地として立ち寄ったシンガポールでの最初の部分。添乗員は団員の安全確保、行程の管理などで旅のリーダーの役目を担う。

ところが何日か行動を共にすると、お客様と近くなりすぎることがある。この旅の後半では控えめを忘れて、夕食時にワインを前にしてお客様と肩を組んだ記憶がある。羽目を外したと翌朝すっかり反省した。

但し例外もある。ある会社の社員研修旅行に添乗したカナダのトロントでの夜の部。ホテルの夕食後なんとなく団員の皆様の目が外に向いていたので、ホテルの近くの品の良い小屋にご案内した。

入場料五ドルは各自払いで舞台の近くに陣取った。ショウが始まると周りの地元客は大声で笑ったり、はしゃいだりしているのに、団員はツバを飲み込んでいる様子で沈黙している。私は舞台から離れた席で間合いを取っていたが、これではいけないと思ひ、心ならずも舞台に近寄って得意の日本語で囃し立てた。

暫らくして、ようやく団員の意味不明の大きな声の日本語が聞こえてきた。すると布地を極端に少なくした衣装で踊り子が、ニコニコしながら舞台の端に出てくる。どうも、日本語の意味が分かったらしい

働き盛りの男性一五人は、一時間程楽しんで満足したのか、帰国してから研修旅行の反省会に招かれた時、その会の名前が「五ドル会」と表示されていたのには吃驚した。

一方で女性客が多い添乗は、間合いがより一層重要で、必要以上に距離を等しく保つことが求められる。ちよつとしたことでツアーが分解してしまう程の、厳しさが有り添乗員の特に気を遣うところでもある。

「遊びながら学ぶ」そして「親しき仲にも礼儀あり」旅の楽しみは奥が深い。

### 真珠庵しんじゅあんの「雪真珠」ゆきしんじゅ

京都大徳寺の塔頭の一つ、真珠庵を訪ねるツアーに添乗した。

桜も散り、春、真つ盛りの四月下旬に、甚九郎宅で面識のあった真珠庵の住職・山田宗正そうしょう和尚に連絡、一般公開はされていないが特別の計らいをさせていただいて実施となった。総勢二六名、当日は花曇り、大徳寺の奥まった庵に到着すると、和尚直々の出迎えてご案内いただく事となり皆さん恐縮しきり。

能登半島の七尾市生誕の絵師・長谷川等伯はせがわとうはくの襖絵のある重要文化財の「方丈の間」ほうじょうで説明を受けていたその時、「パラ、パラ、パラ」と檜皮葺ひわだぎきの屋根に何かがやわらかく跳ねる音が聞こえた。

しばらくして誰ともなく「霰あられでないかいね」。部屋を出て庭を見ると白くなっていた。美術や音楽に造詣の深い和尚のこと、歓迎の趣向として皆を驚かせたのかと思っただが、またパラパラときた。これは真珠庵の名前の由来となったといわれる「雪真珠」ではないか。

「この真珠は珍しい、皆さん運がいいですね」と和尚が言った。空はまた何事もなかったように花曇り、その後和尚の肝いりで方丈の間の隣のお部屋で、お抹茶を頂いた。「さっきの霰は不思議やったね!」「あの一瞬だけが真珠やったね」と持切りだった。

その後、大徳寺の近くの精進料理のお店「二久いづきゆう」にて昼食、和尚と一緒に楽しい一時を過ごす事ができた。後日、和尚がお茶人と度々雑誌に登場しているのを拝見する。あの時、自然体で接して下さった姿に、心温まる気持ちになったのは私だけではなかったと思っている。

### 「ハンガリアン・ラブソデイ」

スロバキアのブラチスラバからハンガリーの首都ブタペストに到着。農業国らしいのどかなバスの旅だった。ブタとペストの間を流れるドナウ川に有名な「くさり橋」が架けられている。ホテルはブタ側の丘の上にある五つ星ホテル・ヒルトン。休憩後、市内観光に出発した。まずは街の暮らしぶりを拝見しようとペスト側の中心街にある中央市場に向かった。一八九七（明治三〇）年に建てられた建物で、外壁のタイルが素晴らしい。中に入ると地下は魚市場、一階が肉、野菜、二階は民芸品等の売り場となっている。一階を歩いていると何故か体が一方に片寄るように感じる。よく見ると床全体が傾斜している。水での床の掃除をし易くしている工夫だ。通路も店舗の佇まいも広く大きく多くの人で賑わっている。

「北河さん、ショッピングはまだか」と、買い物を楽しみにしている奥さんから声がかかったので早速二階のご案内、ブタペストの「カロチャ刺繍ししゅう」のテーブルクロスをお勧めした。小一時間、市場で自由行動の後、同じペスト側にある有名なカフェに向かった。

そこは商業地区のホテルの一階にある「ニューヨーク・カフェ」。この建物は中央市場より古く一八九四（明治二七）年に建てられ、当時からシックな雰囲気です。芸術家が多く集まるところだった。中に入ると豪華なシャンデリアが下がっている。ワイワイ言いながら席について、それぞれが飲み物を注文し始めると、二人のバイオリン奏者が「さくら、さくら」を演奏しながら近づいてきた。

その時、誰かが「待っていました、ハンガリアン・ラプソディ」と続けて言った。当人は日本を出発した時からハンガリーの本場で「狂詩曲」を聴きたいと密かに思われていたようだった。添乗員は少し多めのチップを覚悟した。案の定、次から次へとリクエストが続き。当然チップの予算は大きくオーバーしたが、このテイタムはツアーがまとまる効果で大きく貢献した。

団員は高揚した気分のままカフェをあとにバスに戻ろうと旗を先頭に歩き出した。足並みが遅いので後ろを振り返ると、何組ものご夫婦が、腕を組み、手をつないでいるのを目にした。どちらのご夫婦も古希を迎えているのを知っているので、内心びっくりしたが見て見ぬふりをした。

ハンガリー人民共和国にも夜がおとずれる。夕食後、昼間手をつなぐ機会のなかった有志と名前は忘れたが夜のカフェへ繰り出した。そして、美しいミロのピーナスのような彫刻を沢山鑑賞して、ブタペストの一日が終わった。

## 利休さんを訪ねて

茶祖と称される千利休の生誕地、大阪の堺市を訪ねる旅を企画して添乗。

金沢市出身の実業家、安宅弥吉あたくやきちが創業の旧安宅産業株式会社あたく、その二代目が収集した美術品「安宅コレクション」が収まっている大阪の東洋陶磁美術館とうようとうじびじゆつかんに入った。係員の説明を受けた後、それぞれがゆつくりと展示室に足を進めた。

お目当ては、どちらも国宝の「飛青磁花生とびせいじはないけ」と「天目油滴茶碗てんもくゆてきちやわん」だった。

私は密かに思っているものを探した。それは中国の官窯かんよう（宮廷で使われる器を作る窯）である汝窯じょようの青磁の作品。甚九郎と台北の故宫博物院に同行した時のこと。陶磁器が展示されているコーナーで、「この中で一番価値のある焼物はどれか知ってるか」と問われた。それが汝窯の青磁の水盤だった。汝窯の作品は世界で九〇点程存

在しており、多くは英国の大英博物館にあり、二〇点ほどが台湾の故宫博物院、そして日本には確か数点しかないといわれる。その一点がこの美術館で所蔵展示されている。

「雨過天青」が代名詞の雨あがりの雲間から見える空の青が特徴の水盤で、国宝の近くに展示されていたが、存在感は他を圧しているようだ。しばらくして二、三人のお客様が「あそこにある水盤、素敵やねえ」と言いながら集まってきた。自分の思いを押し付けてはいけな思っていたのでドッキリした。

それから又、何人かがその水盤の話に花を咲かせた。コーヒーを飲んでいた人がそれを聞きつけてもう一度見に行っている。このグループには、お茶の先生も参加しており、日頃からお茶を嗜む人が多いのは存じていたが、それにしても鑑識眼が素晴らしい。

翌日は、堺市にある千利休の旧居跡や、修行をされた南宗寺をボランティアガイドの案内でつぶさに回った。団員は説明に出てくる人名など固有名詞には、それぞれうなずいている。それは何回となくお茶の世界で耳にするので質問もない。これを見ていた南宗寺のお坊さんが「こんな熱心なお客様は珍しい、どちらからですか」。これには添乗員としても誇らしく感じて鼻が高くなった。

昼食は堺市で最後の料亭といわれる「丸三樓」の懐石で、ご主人が丁寧に世話してくださった。帰り際に「利休さんを訪ねて来たが何処においでるかね」金沢弁でご主人に訊ねた。ご主人は突然の質問に目を白黒させていたが「これからどちらへ行くのですか」「仁徳天皇陵に向かいます」「その傍の公園の中に『伸庵』という茶室があります。そこを訪ねなさい」「はあ、わかりました」二人の気持ちが出たり合ったりしてこんな会話が成立した。そして仁徳天皇陵を見学後、間もなく茶室「伸庵」に到着した。

茶室は一回一五名程の立礼席で二回に分けてお抹茶をいただく事にして、一回目が始まり、私は利休さんがどこかと茶室を出た時、「おい、利休さんがこっちにおるぞ」と大きな声が聞こえた。声の主はグループのお茶の先生のご主人だった。声のする方へ小走りで向かうと。千利休は「伸庵」の出口で待ってられました。

いつものように利休帽をかぶられて、恐れ多くも正座で迎えてくれました。堺市の観光係もなかなか憎い演出をする。全員がお抹茶をいただいた後、勿論、利休さんを中心に記念写真を撮った。手元にあるその時の写真をみると、第一発見者の自慢気なお顔がハッキリ写っている。

### ハイジャック事件に

一九九五（平成七）年六月二二日の昼下がり、「プルルーン」と北陸営業部の電話が鳴った。「小松発の全日空八五七便、函館行きがハイジャックされた。金沢西インター店の団体が乗っている模様だ」。本社からの連絡だった。一瞬わが耳を疑った。そしてその団体名と添乗員の顔が浮かんだ。

数日前、別の用件で金沢西インター店で打合わせを行っていた時、その添乗員Mが隣の机で現地と予約の確認を行っていたのに出会った。そして「気を付けて行っておいで」と声をかけて店を後にしたのを思い出した。

急いで店に駆けつけると地元のメディアが情報を取りに来ていた。「どんな団体ですか」「名簿を出してほしい」。そして東京、大阪のテレビ局などから電話が殺到して大騒ぎとなっていた。「団体名も名簿もお出しすることは出来ません」と押し問答しているうちに、個人、団体を含めたマスコミとの対応はJTB本社広報室と決まった。

店長にはその旨を伝えて対応してもらい、同時に団体のお客様の留守宅への電話を開始した。連絡のついたお客様の中には、テレビで知った人もいたが、殆どは「エー」という返答があった。又、年配の女性グループだったこともあり、一人暮らしで連絡がつかない人も何人か居られた。

四時間、五時間と経過し、こっぴやくへんじょうたい膠着状態で心配するご家族との連絡も多くなり「新しい情報はないか」「朝一番の飛行機で取りあえず東京まで行きたい」。全日空側からも、東京まで行かれる方の手配は、いつでも準備している旨の連絡が入っていたが、大半のご家族はしばらく様子を見て行動したいということで一旦落ち着いた。

深夜、午前二時過ぎに、ある新聞社の女性記者が「北河さん、函館空港で警察が動き出した様子です。団体の宿泊場所を教えてください」。いよいよ作戦行動に出たのだと思い宿泊ホテルへ食事と仮眠の手配をお願いした。その後、機動隊が機内に突入解決となった。

数日後、小松空港に帰着した団体を出迎えてご挨拶した際、お客様から「添乗員さんも。大変だったのですよ」とお言葉をいただき、正直よく頑張ってくれたと思う。翌日の地元紙には、「旅行を続けてよかった」の見出しで、お客様のコメントが大きく掲載されていた。

事件当日、函館空港で解放され、ハイジャックされたその飛行機のタラップからM添乗員が、添乗員用のJTBの旗を掲げてその団体の先頭で降りてきた。その様子をテレビの画面で見た時、「この大事件のさなかに、旗を先頭にこれぞプロ添乗員」不覚にも涙してしまった。

## 天蓋付きベッド

インドネシアの首都ジャカルタに一泊、翌日、ボロブドール遺跡を見物後、夕方にバリ島のデンパサール空港に到着した。

一九九四（平成六）年、第七回小堀ツアーだった。団員は一五名（ご夫婦七組と男性一人）と添乗員。今回はのんびり、ゆっくりする事が目的で計画段階からホテルの選択がポイントだった、そこで団体の多い大型ホテルを避けて、個人主体の隠れ家的な、バリ島の海が見えるフォーシーズンホテルを選んだ。心地よい風が吹き抜けるオープンなロビーでチェックインを済ませて、所々に南国の花が咲いている海に向かう小道を降りるとコテージが見えた。石畳を踏み部屋に入ると、海が見えて程良い広さの庭に、二坪程の光が入った小さなプールがある。

部屋の中央には、木組みの天井の下に、天蓋付きてんがいっのベッドが二つ並んでいる。続きの部屋の奥には、大理石の床に、素敵な白いホーロで楕円形の猫足バスタブが置かれている。庭や部屋の中は、ほのかな明かりがムードを醸かもし、波の音がかすかに聞こえるだけで、辺りは静まりかえっている。

この部屋は、今回奥様が都合でご一緒出来なかったご主人と私の二人、夕食は海辺の木に囲まれたレストランを一六名で貸切り、のんびりゆっくり戴いた。その後三々五々、砂浜を散策し夜風に吹かれながら部屋に戻った。

男二人は庭のプールに入り、アルコールとも付き合ったが、いつもと様子が違う事に気が付いた。男二人でのんびりゆっくりは何か手持ち無沙汰なのだ。

やがて仕方なくベッドに入ったのだが、今度はやけに天蓋てんがいが目につく。ベッドに横になりお互いレース越しに目を合わせて苦笑い。「金沢に帰ったら、天蓋付きのベッドを買おうかな」と、のたまう。きつと残してきた奥様のことを思い出していたに違いない。六四歳の男性にこう言わせたのはこの部屋のせいで、添乗員の私の責任ではないと思っている。

金沢の小唄会では堀派の井波柳子いなみりゅうこうし師匠に教わっている仲間であり、金沢のライオンズクラブの創立会員であるご本人からのお誘いで仲間入り、今回はフリータイムにゴルフのお付き合い。それなのに添乗員がお気に召さなかったようだ。

翌日、ホテルからバスで約一時間半の距離の夕陽の美しさで名高い「タナロット寺院」へ出掛けた。バスを降りて近づくにつれて人出が多くなり皆着飾っている。男姓は白の詰襟の服と黄色の腰巻姿で若くて男らしい。女性は色とりどりの上衣と腰巻をまもっていて美人揃い、頭には果物等をいれた籠を乗せていて神様へのお供え物のようだ。

通り道には夜店が開かれ。アセチレンガスの火が日本の田舎の祭りを思い出させる。海岸まで歩くと、丁度、水平線に金色の太陽が沈むところだった。

人々は打ち寄せる波に、岩場で素足を洗われながら歩き、海に突き出た岩礁の上にある海岸寺院に列を上げて上がる。

「バリは祭りの島」で、毎月のようにお祭りが何処かで行われている

## 「ルンビニ」

インド仏教の八大聖地の一つである釈尊しゃくそん生誕せいだんの地のルンビニは、インド北部の国境からバスで三〇分程のネパール領にある。一九九三（平成五）年二月、宗教関係の団体のインド仏跡巡りに添乗した。

インドとの国境でネパール入国ビザを取得し、そのルンビニに入ったのは午後三時過ぎだった。釈尊生誕の地の根拠となったアショーカ王の石柱や、釈尊の母マーヤ夫人を祀る御堂の他に目立つ建物もなく、のどかな平原の佇まい。子供の頃遊んだ田舎の風景を思い出して懐かしい気分ひたつた。

宿泊は日系の法華倶楽部、平屋造りで、周りの風景に気を使ったロジ風のホテルだ。久し振りに和食での夕食の後、それぞれ中庭に出た。夜のとぼりがおり、あたり一面霧が立ち込めている。物音一つしない静けさで、ガーデンライトもかすみ月はおぼろげに空に浮かんでいた。ひんやりとした空気が肌になんともいえず、幻想的な雰囲気ですべてを包んでくれた。

翌日、一行はバスで祇園精舎に向かった。平家物語の書き出しの「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり」で知られる祇園精舎は、ネパール国境に近いインド北部のサヘート・マヘート市の郊外にあり八大聖地の一つでもある。

ここは土地の有力者が釈尊に提供した場所で、樹木も多く訪ねた日も岩の上で太陽が沈む西方に向かつて、念仏を唱え修行する人々を多く見かけた。近年、日本から寄贈された「祇園精舎の鐘」も建立されお参りが絶えない。

インドはカースト制度で身分が分かれている。観光バスは殆どが板バネのクツシヨンで、三〇人の団員の荷物はバスの屋根に載せて走る、そこで、運転手の他にアシスタントが乗務してその荷物を管理する。又走行中は運転手の横に座り、煙草をサービスしたりする運転手のお抱えアシスタントで、アシスタントは運転手にならない身分だと聞いた。

一週間このバスにお世話になって、最終日に多めのチップを運転手に渡したが分け前に預かることができただろうか。心優しい運転手だったので多分大丈夫だろう。インドは自然のままが懐かしく感じられて、エコロジーや信仰心の面からも人気のある旅行先となっている。

たまたま、今回の旅の最初の到着地ニューデリー空港で、入国審査に向かう通路を、旗を持ちながら歩いていると、向かい側からも旗を持った一団が来る。お坊さんを引率して日本に帰る団体と見たが、旗を持った添乗員もお坊さんのように見える。よく見ると、おいしい、福井支店のY君ではないか、同期入社の中良しで笑顔

が絶えない男だ。インド仏跡巡りで、更に修行を積んだ雰囲気を醸し出している。会うのは久し振りで積もる話はあるが、今日は手を上げてお互い軽く会釈をかわした。広い世界の中、インドでのこの鉢合わせはインドが観光の目玉になる兆しと捉えたい。

### 「ほのぼの旅行」

旅行の形は、個人と団体があり、そしてそれぞれがオーダーメイドとレディーマーに分類される。

遠くへ行きたいという旅行熱が盛り上がってきた一九七四（昭和四九）年に、JT Bと国鉄（現・JR）がタイアップして、北陸から出発する団体旅行商品を発売することになった。北陸の旅行業界では大量仕入れ、大量販売の企画商品はまだ珍しい頃だった。

お客様に団体の割安な旅行費用で、手に届きにくかった遠い所へ旅していただき、加えて北陸の冬を一時忘れて暖かい所へ行くことを目的とした。

早速、第一回目は西九州旅行で、翌年の二月に一回八十名で一〇回の設定となった。下見打合せも終わり、募集計画に入る段階で団体のネーミングを南国の暖かさを想わせる「ほのぼの旅行」を冠にする事が決まった。

新聞広告やチラシを作成し、営業マンのセールスなど今までにない販促活動を行った。ところが、冬に旅行に出ることの少なかった北陸のお客様に、なかなか受け入れてもらえなかった。一〇月から発売開始したが、一二月に入っても芳しくない。いろいろ検討した結果、九州の暖かい雰囲気など、新聞紙面を利用することになり地元紙「北陸中日新聞」のご協力もいただき、写真や説明で旅行情報を宣伝した。

すると、年が明けてから反応が良くなり、一〇回設定のうち八回までが満員の六八〇名様を超えるお申込みがあった。三泊四日の旅はこうして始まったが、各班が終了する毎に、添乗員から「平戸で雪がちらついた」「阿蘇山で雪に見舞われた」など一部寒い報告があり気を揉んだ。

ご参加のお客様は、ご夫婦、ご家族連れ、女性グループなどだった。全班が終了して、お客様のアンケートは旅行の内容、費用ともに、おおむねご満足いただいた結果となり、次回はぜひ南九州をとの希望が多くあった。その後、南九州に続いて四国、沖縄と毎年回を重ねていった。

ある年には、体力的に遠くへ行けないご年配のお客様の要望で、山中温泉旅館組合とのタイアップで「ゆつくり山中温泉二泊」を同時に並行して実施、六百名近いお客様をご案内した。旅行熱はますます高まりを見せて、北陸発着の旅行商品の需要も多くなり、JTB「北陸商品企画センター」が開設され、個人、グループの旅行商品を造成販売する事となった。

## 国際結婚

香港島にあるホテル・ビクトリア（かいこうはんてん海港飯店）の一階ロビー。

一九九二年（平成四）一〇月、北陸の薬品会社の添乗で香港に滞在中で、団体の幹事との行程打ち合わせが終わった時だった。

「北河さん、おはようございます」と、小柄で眼鏡をかけた青年が声をかけて来た。一瞬、誰かと思ったが、何度か香港でお世話になったJTB専属のガイドだった。一瞬、誰かと思ったが、何度か香港でお世話になったJTB専属のガイドだった。

「あなたの会社のOさんはお元気ですか、私は今、Oさんと手紙の交換をしています。彼女は今度いつ頃香港に来ますか」。自分の言いたい事を矢継ぎ早に発した。私が香港に来ていることを事務所で聞いて慌てて飛んできた様子で、「Oさんに宜しく、私は他のホテルにいる団体のガイドに、これから行きます」。あっけに取られている私を尻目に、ホテルを出ていった。

その後、二年ほど経って、事務所でOが私に話があると言ってきた。「今度、結婚したいと思っっているのですが」咄嗟に香港での事が頭に浮かんだ。

「まさか外国人ではないやろね」金沢弁丸出し。「香港のガイドLです」一瞬彼女のご両親の顔が目に見え浮かんだ。そして何度か香港への大型団体に連れて行った私にも責任があると思ひ、彼女に内緒でJTB香港支店の金沢出身の友人T君に相談した。

私の彼に対する印象は廊下を曲がる時など、きびすを直角にして曲がる雰囲気を持っていた。香港からも実直で真面目な人柄の様子だった。

一九九七（平成八）年の、香港の中国返還を目前にしての結婚に一抹の不安を覚えて、その点について彼女と何度か話し合った。その都度、彼を信頼して目をキラキラさせながら将来のことを語った。それからしばらくたって小松空港発のチャーター便を利用して香港に旅立った。

国際結婚をして、外国で日本人観光客のガイドをしている人に時々お目にかかる。悩みはその殆どが、日本は遠いので、なかなか日本にお里帰り出来ないところぼす。香港は日本みたいな感じだ。結婚のカードが送られてきて幸せそうなウエディングドレス姿を見て、これでよかったのだとしみじみ思った。

その後、彼女は香港の旅行業界に身を置いて、日本への視察旅行の添乗で活躍の様子だ。香港に行く機会があればその時には子供さんとご一緒のご夫妻に会えればと思っている。

### 「マリア・テレジアイエロー」

日本、世界を旅するといろいろな風景や場面に出会う。そして街並みもそれぞれのお国柄、土地柄が出る。中でもオーストリアのウィーンは何度か訪れた町で好きな場所の一つ。ハプスブルグ家の女帝マリア・テレジアが君臨した由緒あるシェーンブルン宮殿がある。その大きさと、華麗さに誰もが圧倒される、そして庭園も素晴らしい。街並みは最初に訪れた三〇年前と現在も殆ど変わらない。

特に目を引くのは、この宮殿の外壁の色と同じ黄色が多く使われていることだ。その黄色が「マリア・テレジアイエロー」とよばれていること知ったのはしばらく経ってからだった。女帝が自分の住む館に好んで使った色で、なぜかずっと気になっていた

二五年程前のある日、「北河君、あんたの家を今建てとる」と、北陸ミサワホームの林社長からの電話だった。「何、何、何処で」こう返答するのが精いっぱい。

お聞きすると「輸入住宅を販売する為、アメリカ・シアトルの住宅会社に社員を派遣して建設、販売のノウハウを習得させた、早速、子会社にして直輸入の何棟かを建てた。その一棟が若松町に建てている物件だ」。なるほど、今、私が住んでいる所と目と鼻の先だ。「小堀ツアー」の幹部団員で、会社の社員旅行は当社が担当なので、断る理由が見つからない。

そこで「マリア・テレジアイエロー」の登場で、条件はただ一つこの色で外壁を塗ることにした。完成が近くなり、現場で責任者と打ち合わせをしていた時、責任者が「林社長がこの物件を譲ってくれんかなあと云っている」と一言。冗談とは思いつつも「なんのこっちゃい」

その理由が後日分った。この会社が石川郡美川町（現・白山市）にシアトルの住宅会社にデザインを依頼して宅地造成した団地に、この色を使った住宅が何棟も建っていた。そうか何度かウインにご一緒しているので林社長もこの色の虜とりこになっていたのだ。建設会社の社長と恋人色住宅の取り合いになったのだ。勿論負けるわけにはいかない。本人とはこの件については一切話をしていないが、我が家の玄関の表札は林社長の直筆で、頑固な体に似合わず達筆である。

### ライチー狩り

台湾は小松空港から四時間で台北空港に行ける人気の観光地。

二〇〇五（平成一七）年 六月、第一八回「小堀ツアー」ご一行一八名と添乗員。

今回は甚九郎が懇意にしている台南市のレストランの女主人を訪ねて、中国の楊貴妃ようききが好んだといわれる「ライチー（れいし）」を、木から直接もいで食する目的の珍しい旅。

その女主人と甚九郎の出会いは、関西空港がまだ開設されていない頃で 大阪伊丹空港から甚九郎夫妻が台湾へ出発、その機内で隣り合わせたのが始まりだった。

その後、甚九郎は何度もレストランを訪ねている。女主人の娘さんが日本へ短期留学を希望された時、日本語学校をお世話するなど家族ぐるみのお付き合いになっている。

ツアーは、甚九郎のお気に入りの高雄市内を流れる愛河の畔のアンバサダーホテルに宿泊。

翌日、いよいよ「ライチー狩り」に出発です。女主人の先導でバスを走らせること約一時間、山間の小さな部落に到着した。バスを降りて二、三分歩くと大きな家がありその門をくぐった。そこには大きな庭があり大勢の人が待っていた。見回すと奥の方の畑一面に、全体がピンク色に染まった大きな木が並んでいる。庭にはテールブルが幾つもセットされていて。その前で女主人が甚九郎に村長さんを紹介した。村長さんの歓迎の挨拶が上手な日本語で始まった。その間、三分間位だったが団員がソワソワしているのに気が付いた。団員の目が向こうのピンク色の木に釘付けになっている。村長さんもそれを感じたのか、「ライチーをどうぞ」と挨拶を締めくくられた。

すると、全員が一斉に畑の間を駆け出した。「なんのこっちゃねん」と言いながら私もつられて走り出した。ライチーが明るいピンク色の皮に包まれ、手が届くところにたわわに実って下がっている。取ってもいいのか躊躇していると、畑のご主人が「どうぞ、召し上がって下さい」と日本語で言った。最初は恐る恐る木に取り付き、その実の皮をむき口に入れる。「こんな美味しいもんが、あったがかいや」「ほやな、おいしいな」と、金沢弁が聞こえる。そして又、口に入れている。

果実は透明でみずみずしく上品な甘さ、何故か楊貴妃を思わせる。ご主人が出荷を少し遅らせて我々を待っていたと、後で女主人が語ってくれた。

それから台南市の山手の「烏山頭ダム」見学を予定していた。

金沢市出身の八田与一が技師として台湾に渡り、当時東洋一と言われた烏山頭ダムの建設に尽力し、一九三〇（昭和五）年に完成、その灌漑施設が台南に穀倉地帯を作り出した。その事が台湾の学校の教科書に掲載され、台湾で一番知られた日本人になっている。台湾の李登輝元総統も農業の関係でその業績を大変尊敬していると聞いている。

そのダムの公園にある記念館を見学、記念館の年配のガイドが涙を流さんばかりの説明に団員も感動して聞き入っていた。公園の木陰に片膝に頬杖ついて何かを考

えている様子の八田与一の座像に花束を手向けてお参りした。

その後、女主人はもう一つの果実を味わってほしいと、台南市のその産地にバスを向かわせた。産地に近づくこと、道端の小さな市場らしいところでバスを止めた。その果実パイナップルが古い板戸の上に無造作に並べられている。

触ると果汁が染み出るくらい熟したパイナップル、女主人は二、三個バスに積み込み、器用に皮をむいて団員に食べさせてくれた。鱉べっこういろ甲色で芯がなく全体が果実で今迄に味わったことのない味覚を堪能した。甚九郎は今回の体験を「ツアーの目玉に組み入れたらどうか」とも語ってくれた。

そして夕食はホテルの中華料理を選んだ。全員がおめかしして一九時から始まったが、ここは私の出番とホテルにお願いして密かにある者準備した。食事が終る頃合いを見計らって、お座りの四つのテーブルに、今日のライチーとパイナップルをデザートとしてお出しすると。皆さん直ぐ無言で手に持ち目をつぶった。

## ナイロビの用心棒

仏教関係の団体からアフリカの太陽、水、山を存分に入れたコースで出発したいとご注文を頂いた。早速、日程を決めて予約手配をして、二〇〇一（平成一三）年四月、成田空港からロンドン経由でナイロビ空港に到着した。まずは長距離だったのでホテルで英気を養った。

今回ナイロビに入って感じたのは、以前に比べて温暖化の影響か街中の所々で砂に覆われている場所が目立つ。そしてなんとなく殺伐とした感じを受けた。ホテルのフロントに、明朝、近くの高台まで歩き太陽を礼拝したいと団体が希望していると伝えた。すると「心配ないと思うが、ホテルで警備員を付ける」と、フロントが言うのでお願いした。

翌朝六時に団員一八名が集合した。ロビー周りを見ると浪人風の五、六人がこちらを伺っている。「ホテルの警備員はまだですか」と聞いた。フロントはその浪人風を指さして「あそこにいる彼等です」。格好は失礼だが警備員には見えない。

これでは、万が一襲われても敵味方の区別が出来ない。そこでフロントに「誰か

一人ホテルの人をお願いします」と命令した。ようやく体制ができたが心配でも棒切れを持った。これでは用心棒の用心棒だ。

高台までホテルから歩いて片道一〇分程、周りは公園になっている。すれ違う人は不思議な顔をして通り過ぎる。服装もすっかりとしたビジネスマンが多い。何だか変な気分になってきた。ホテルに帰着してホッとした時、浪人風が近寄ってきて「サンキュウ」と言った。失業対策のアルバイトだったのかも知れない。今回の旅は最初から荒れた様子を感じさせ、緊張を強いられるかも知れないと気を引き締めた。

### キリマンジャロとビクトリア湖

ケニアの首都ナイロビからタンザニアに入りキリマンジャロの麓のホテルに入った。ホテルは日本からの登山隊の基地などに使われており、ロビーには日章旗や寄せ書きが展示されている。

翌朝、近くのコーヒー農場主のお宅を訪ね、英国風のお宅で上品な老夫婦が迎えてくれて、本場のキリマンジャロのコーヒーとバスケットをご馳走になった。午後は快晴、アフリカ大陸の最高峰キリマンジャロ山（標高五八五〇メートル）が近くに見える丘に登り礼拝、その後サファリドライブの本場、世界遺産の「ウゴロongo自然保護区」に向けてバスを走らせた。象、キリン、ライオン等が群がる広大なサファリを専用の車に乗り換えて楽しんだ。

ホテルは洒落た「セレナ・サファリロッジ」。ここからはアフリカ大陸を南北に縦断している大地溝帯が眼下に広がり、庭のプールからも一望できる。夜はカウンターバーで皆さんと一息入れた。

今回は水も礼拝の目的なので、ナイロビに戻りアフリカ最大の湖「ビクトリア湖」を目指すコースを組んでいた。ビクトリア湖の広さは琵琶湖の百倍位、ケニア、タンザニア、ウガンダの三国にまたがり世界でも第三位の大きさ。ナイロビからの移動はチャーター便が便利で、ナイロビのウイelson空港からの出発となった。

空港は殆ど日本のバスセンター状態で、ひっきりなしに「空のタクシー」が飛んでいる。途中の給油地を経由してビクトリア湖に近いキスム空港に到着した。

ビクトリア湖は漁業が盛んで湖畔の魚市場を見学、日本人が珍しいのか人々がニコニコしながら人懐こい様子で寄ってくる。湖畔のホテルで昼食後、広いホテルの庭を散策し、波打ち際の芝生に場所を取り湖に向かって礼拝を行った。これで、このツアーの三つの目的の太陽・水・山を全て礼拝したので、団員の表情は誠に晴れやかだった。

事が起きたのは、帰路のチャーター便が途中給油で降りた空港を、いくら待てども出発しない。ガソリンを入れる係員がいらないと言う。そうか、ここは出番だとパイロットに頼んで空港の係員に少し大きめのドル紙幣を用意した。そして間もなく空のタクシーは出発することが出来た。乗ってから「アフリカはのんびりしとるな」と誰かが一言、チップが飛行機を動かしたことは知る由もない。

飛び立ってから暫くして、「飛行機の影が左側に映っているぞ」と誰かが叫んだ。左側の窓の方向の雲間に、薄っすらと丸い虹があり、その中心に飛行機が浮かんでいる。ブロッケン現象で機内は大騒ぎになった。

夕方で太陽の光が後方から飛行機を照らす。そしてそのまま飛行機と一緒に虹が動く。「礼拝が終わっての仏様の思し召しとしか思えない」と団員が話す。その時パイロットが機内に入ってきて「飛行機が左に傾いている、至急座席に戻りなさい」。私も慌てて一緒になって座席に戻るようお願いした。

## スキーツアー企画

一里野高原スキー場が名峰白山の麓に一九七七（昭和五二）年一二月にオープンした。尾口村の北出村長から、スキー場への誘客の為、「金沢から日帰りスキーツアーを企画してほしい」と依頼があった。久々の新しいスキー場オープンなので、スキー人口拡大が見込めることから、「こちらからもお願いします」と早速打合せに入った。

往復バスと一日リフト券をセットし、さらに尾口村観光協会の山崎正夫会長にお願いして、会長経営の一里野高原ホテルの入浴券込みで販売することになった。

第一便を早朝の金沢駅へ見送りに行ったところ、親御さんと一緒の小学生、中学生の参加で大変な混雑だった。その後、シーズン中の毎日曜日の催行だったのが、

平日にも増車に次ぐ増車で好評を得た。

そうこうしているうちに、気がつくともスキーを知らなかった私がスキーを履いていて、スキーの面白さもわかってきた。

翌年には一里野と並行して、志賀高原や妙高高原に直行スキーバス「ホワイトアロー号」も運行開始した。当時、北海道の仲間ですきTB札幌支店にいたO君が、TBの運営する「札幌国際スキー場」に出向したとの連絡が入った。早速全日空金沢支店長に「北海道スキーツアー」の企画を持ち掛けた。

冬の札幌便は搭乗率が悪く、頭痛のタネだったようで二つ返事だった。大阪から赴任していた猪瀬誠三支店長にこの際、スキーを覚えてもらう事が必要と何度か一里野へご一緒して滑った。

そして、企画の募集に入ったが思うようにお客様が集まらない。「北海道へスキーに行く人」は、まだ珍しく時期尚早だったようだ。スキー先進地の北海道は設備も充実しており、ナイタースキーや、アフタースキーも楽しめる。当時は東京からのお客様が多く、北陸からも間もなくの気配はあった。

その後のスキー旅行の需要は、若者を中心にどんどん盛んになり、暫くして北陸地区のJTB関連会社として「サン&サン北陸」がスキー等、スポーツの主催旅行を主業務に設立された。

### 新入り操縦士

訪れる人々の夢が舞うカジノやネオン輝く大通りが、嘘のように今朝のラスベガスの空は晴れわたっている。

一九九一（平成三）年二月、午前九時一五分、ラスベガス空港を出発した一九人乗りの小型機は、グランドキャニオンに向けて飛び立った。機内の座席は両側に列ずつ並んでいる。私の斜め前の席にはブロンドのボーイッシュな女性が座っている。

時々、隣の席の男性と話をしながら、手元の書類に目を走らせて何やらチェックしている。いつもの様子と違うので、その男性に「何をしていますか」と尋ねたところ「今日は、新規採用した操縦士の初フライトなので、女性の教官が同乗して

チェックをうけているのだ」と言った。この操縦士は他の会社の役員専用機の機長だったが、リストラでこの会社に応募してきたとの事。

グランドキャニオンは峡谷を低空で飛行し、観光客が景観とスリルを楽しむ事で有名などころ。今回はスリルの条件が一つ加わったようなもので、気のせいかぎこちない飛行に思われた。時々、旋回するたびに朝の太陽が窓に反射して眩まぶしい。

一時間三十分の飛行でグランドキャニオン空港の滑走路にドスンと車輪が着き緊張が解けてホットした時、機体が左右に蛇行だこうしているのが感じられ、咄嗟とっさにブロードの教官を見ると、隣の男性に目配せして手を広げて肩をすぼめた。

自動車運転免許試験で横に教官が乗り一部始終をチェックされた時のことを思い出した。そして、グランドキャニオン観光後の帰り便は、女性教官が操縦して我々を安心させてくれた。

女性が頼もしく感じた旅行として、冬のカナダでジャスパーからカルガリーへ大型バスで向かう途中、カナディアンロッキの峠で猛吹雪に見舞われた。

視界が悪く曲がりくねった雪道で、何度も立ち往生した。それでも、女子プロレスラーに似た体格のドライバーが、巧みな運転を披歴して難局を切り抜けた。それ以来のことだった。

## 大失敗の巻

一九九五（平成七）年 五月、北京にある「中日友好病院」の視察と北京観光のツアーで出発した。一行二八名が北京空港で「査証許可名簿」順に入国審査に入った時だった。

係官が「この人の名前が名簿に見当たらない」と言った。一瞬、何の事かと思っただが、出発一〇日前に参加者が一人、入れ替わった事を思い出した。変更したのが届いていなかったのだ、さあ大変、背筋に冷たいものが走った。無査証で入国する事は出来ない。ここは中国、一筋縄ひとすじなわではどうにも仕様がないと覚悟した。

「何とか査証を取る方法がないか」と係員と押し問答となった。そのうち係員は奥の方の上司に伺いを立てている。しばらくして上司が出て来た。「しめた」

事情を聞いて席に戻った上司は、本庁への電話を開始した。

「特別許可で個人ビザを発行します。写真撮影しますので本人はこちらへ」。妙齢の女性が本庁を説得した力には、中国に「天の半分は女性が支える」の諺ことわざがある。「特別許可」が如実にじつにそれを実感させられた。更には、私の襟のJTBバッジも今回は力になったと思っている。

バスを出発させて、車内でお待たせしたお詫びに「本日の夕食のお飲み物は、私の勘定にします」と言った時、誰かが「明日も何かあるとよいな」と言ったのでバスの中は大笑いとなり、平身低頭へいしんていとうでお許しをいただいた。

そしてその何かが現実となった。三日間の見学、視察を終えた最終日に、北京市内を見渡すことができる「景山公園けいざんこうえん」にご案内した。ところが、見物後、集合時間になっても、年配の女性お二人が戻ってこない。バスに戻ろうとして別の入り口に戻ったのかもしれない。タクシーを使って公園の周りを探した。見つかった時は帰りの飛行機の時間も迫り、時間調整が裏目となり大いに反省したことだった。

大失敗には、私自身が被害を受けたケースが一度ある。

ニューヨークのタイムス・スクエアの近くのバーに、お客様と同行して支払いを済ませて外に出た時だった。若い女性が二人、前から近づいて来て突然私の急所を押えた。ひるんだ隙にズボンの左ポケットに入れていた何枚かのドル紙幣を抜き取り来た道に戻って逃げた。バーで私がお金を支払うのを仲間が見ていて連絡したのだろう。

「盗られたら、取り返すな」深追いは禁物だ。命を危なくする場合がある。案の定、二人組が走り去る薄暗い路地に、エンジンをかけたままの車の中に男性二人が待機していた。柔らかなショーウーを見た気のゆるみが大失敗になった。

今回の二度、大失敗が続いた北京旅行は、辛抱していただいた優しいお客様の顔とともに忘れられない旅となった。

## ミャンマーの盆踊り

ミャンマーのジャン州にあるインレー湖に向かう為、首都ヤンゴンから航空機で

一時間三〇分のヘーホー空港に着いた。空港から駐車場までの三百メートル程の並木道を歩いていると懐かしく、清々しい風と木漏れ日が私たちを迎えてくれた。

「小堀ツアー」一行二十名。アジア民族研究所の金子所長のアドバイスを受けて出発となった。空港からインレー湖の船着場に着いて、エンジンの付いた小舟に分乗して湖上に浮かんだ漆の村を訪れた時、突然の訪問にも関わらず作業を見せていただき、年配の家長を、家族何人かで支えながら引き合わせてくれた。年長者を敬う穏やかな気持ちと、何気ない仕草に心洗われる思いがした。

湖が生活の基盤になっている様子で、漁業、農業は浮畑うきぼた（湖に浮かぶ畑）での野菜栽培、繊維（絹織物）工房などがある。首長族くびながぞくの村にも足を踏み入れた。

その後、首都ヤンゴンに戻り、金子所長の肝いりで、当時外国人の入域が認められていないモン州のパンの町を訪ねた。

大型バスも滅多に入らないような道路をヤンゴンから八時間、到着後ホテルに入り、夕食を済ませて広場へ誘われ、そこには二百名以上と思われる人々が、電力事情もままならない様子で、裸電球が下がった広場の真ん中に舞台を組んで我々を待っていてくれた。

そしてカレン族の民族舞踊が始まった。「盆踊り」だ。夏の夜のムムンした雰囲気にピッタリの踊りで、その旋律も日本の盆踊りと似ている。何故か懐かしく団員も輪の中に入っている。長距離のバス旅での疲れも吹っ飛んでしまった団員はミヤンマーの人々の温かさに酔いしれていた。

旅の最終日はヤンゴンのホテルでのさよならパーティを組みこんでいた。そこに、金子所長の友人で親日家のミヤンマーの文化大臣がお見えになり座は盛り上がった。そしてミヤンマーの国で行進曲となっている日本の歌「見よ、東海の空開けて、旭日高く輝けば」を文化大臣と皆で手をつないで合唱し、一二日間の旅を終えた。

## 連絡船ロマン

「上野発の夜行列車降りた時から、青森駅は雪の中」お馴染みの阿久悠作詞の「津軽海峡冬景色」の一節です。

大型の農業団体の下見で幹事さんとご一緒した時のこと。最初の打合せが三沢温泉みさわおんせんなので、上野駅から特急列車に乗り三沢駅で降りようとした時に、車内放送が「JTBの北河さん、三沢から札幌への飛行機が、欠航しているのでそのまま札幌へ行って下さい」と知らせてくれた。三沢温泉のホテルの女性支配人からだった。今日の予定は三沢で打合せの後、最終便で三沢空港から札幌空港へ入る予定にしていた。支配人の心使いに感謝しながら慌てて元の席に戻った時、近くの席の若い女性がこちらを見て微笑んだ。「なんと騒がしい人達だろう」と言わんばかりだった。先程の放送を聞いていたに違いない。

青森駅から連絡船十和田丸に乗船、出帆しゅっばんのドラの音とともに船室に入るとさっきの女性と同じ船室だった。連絡船の旅は四時間、団体引率と違って余裕があったのか、連絡船の雰囲気なのか「どちらまで、行かれるのですか」「札幌へ帰ります」。一言、二言、言葉を交わした。黒いショールの似合う女性は一人旅の様だった。

函館駅で夕食をとる為、幹事さんと駅前の食堂に向かった。すると向かいから黒いショールの彼女がやってくる。食事を終えて駅に戻るのだろうか。幹事さんと一緒だったので、お互いに頭をさげて通りすぎた。

黄昏の函館駅、何処の誰とも知らない相手との巡り合わせ、有名な、菊田一夫の小説「君の名は」の世界ではないか。ちよつと大げさ。

幹事さんは年配の団体の部長で、日頃のお付き合いで私の知るところ、世の中の酸すいも、甘いも噛かみ分わける人物、それでも今の私の心の内は知る由もない。

早朝、札幌駅に到着、タクシーに乗り込む女性が、後列こうれつに並ぶ私達の方に会釈した。私も会釈し「さいなら」と言った。後にも先にもこれ一回きりの青函連絡船口マンだった。肝心の下見は北海道の層雲峡そうつんをんせう、網走あはしり、知床しれとこをまわり、三沢温泉に戻り支配人にお会いして終了した。

## 木落とし坂

「男みるなら七年一度、諏訪の木落とし坂落とし」

御柱祭おんばしらまつりで有名な諏訪大社と、サンリツ服部美術館で国宝の白樂茶碗しろらくちやわん「不二山ふじさん」を

鑑賞し紅葉真っ盛りの美ヶ原高原めぐりツアーに添乗。

七年毎に諏訪大社の社殿の四隅にあるモミの大木を建て替える祭りが御柱祭り。

今では全国から多くの観光客を集める大祭となっている。大社参拝で御柱おんはしらの大きさにびっくりした団員の希望で、「木落とし坂」の現地を訪ねることとした。

諏訪湖から一〇分程の山手にあるその坂は、木と人がぶつかり合うあの激しさが嘘のように、朝露がひかり静まり返っていた。お客様は二度と訪れる事が無いかも知れない。そんな思いで旅行企画の段階からプランを立てている。現地で団員が興味を示せば、美術館等では鑑賞時間を延長することがある。

今回、サンリツ服部美術館でこんなことがあった。国宝の茶碗など茶道具にまつわる物語を係員から熱心に約二〇分説明を受けた、二、三人の男性が、手持ち無沙汰にしていたので隣の喫茶コーナーにお誘いした。しばらくして、見学が終わった女性陣が戻ってきて「良かったねえ、ほんでも、あつという間やったね」と金沢弁。その仲間に奥さんがいる旦那さんが、これを聞いて「あれで、あつという間か」と苦笑い。それでも旦那さんの表情は満足そうだった。

美術館入場の団体は、お客様の美術に対する知識が以前と比較して各段に向上している。案内は出来れば美術館の担当者の対応が望ましい。館の特徴、見どころの案内で十分、又、美術館は展示作品の説明書の字が小さくて見にくい、ていさい体裁よりもお客様に楽しく鑑賞してもらえるかの時代だ。

先般、ツアーに百一歳のお客様がお仲間と参加された、八十代の参加が当たり前になりつつある現在、旅行はいち早く人生百年時代に入っている。それに対応した観光業界全体の仕組みづくりが必要になっている。

今回はゆっくり観光と見学が出来てお客様の評判はよかった

## シンデレラ城

ドイツの住宅事情を視察するツアーに添乗した。

一九八九（平成元）年 五月、ドイツのフランクフルト郊外で行われた二日間の宅地開発セミナーを終えて、中世の街並みが今でも息づく、全長三五〇キロのロマン

チック街道を北から南へバスで下った。街道沿いは赤い屋根、黄色や肌色の壁の木組みの家並みや石畳が続き、小さな丘陵に教会の塔や古城が点在する。途中、その中世の街並みが残るディンケルスビュールの食堂で昼食をとった。

一時間程の自由行動の間、何人かと街の散策に出た。途中に大きな木に囲まれた歴史を感じさせる公園を見つけた。賑やかな声が聞こえるので近づいてみると小さなゴルフ場だった。

公園の中央に古めかしい白い窓枠の洒落た食堂があり、そのテラスで食事をしている華やかな服装の七十歳前後の男女が大勢いて、緑一色の風景の中で大変映えていた。ゴルフコースは、その食堂兼クラブハウスの回りにレイアウトされていて距離も短くプレーしている人も視界に入る。ゴルフまであたかも中世の頃にあったかのように、アレンジして引き込んでいる感じがした。なんと余裕のある老後の暮らしぶりだろう、暮らしの懐が深い。

次にバスが向かったのは、ドイツニーラントにあるシンデレラ城のモデルとも言われるノイシュバンシュタイン城で、麓でバスから馬車に乗り換える。御者の合図で出発、蹄の音を響かせながら、緑深い小道を一五分くらい進むと、ゆっくりと木々の間から、見え隠れしながらお城が近づいて来た。

ルートヴィヒ二世が一七年間かけて完成したと言われるだけあって、城の造りは煌びやかで豪華だ。北ドイツを旅するなら五月が最もさわやかさを感じせる季節だ。

## 旅先の自炊

作家 塩野七生の小説「海の都の物語」でベニス（ベネチア）の栄枯盛衰が描かれ、ベストセラーになった頃からイタリアを巡るツアーが増えて来た。

その北イタリアのベニスは夕闇がせまり、日中色とりどりの衣装をまとった観光客で賑わったサンマルコ広場あたりは、街灯に明かりが入り夜の装いになった。

「ゴンドラ・セレナーデ」と呼ばれる運河巡りのゴンドラ二艘に分乗し、出発したのは第六回「小堀ツアー」一行一六名だった。一九九三（平成五）年九月、ローマを振り出しに、ウフィツィ美術館のあるフィレンツェ、中世の佇まいのアッシジ、そしてサンマリノ公国を回りベニスに到着。

午前中はショッピングや、サンマルコ広場のカフェテラスでバイオリンの生演奏を聴きながらのテイタイムなど、各人思い思いに過ごした。

昼食は「おにぎりパーティー」。旅行も長くなると、途中で日本食が恋しくなる。そこで、それぞれが日本から持参してきたおにぎり、お粥、みそ汁、牛丼、お新香、梅干し等を持ち寄り旅行中に一度開いている。おにぎり等すべてお湯があると現物となるインスタントだ。レストランのウェイターも入って、ワイワイ、ガヤガヤと準備していると、外人客が物珍しそうに近寄ってきた。お粥に興味を示したようで、ボウルに梅干しを添えてすすめると恐る恐る口にした。結果は「オーライ」で「もう一杯」となった。

さて、栈橋を離れたゴンドラはサンマルコ運河から狭い水路に入った。昼間の喧騒が嘘のように静まり返った中、幾つかの石橋をくぐり抜けて進む。直角に曲がる所は船頭が声を掛け巧みにゴンドラを操る。

街灯にぼんやり映しだされた中世の石造りの建物に、カンツォーネの歌声が吸い込まれていく。ふと見るとご夫婦はタイムトンネルに入ったかのように寄り添ってこの風情を楽しんでいる。四十分ほどゆられて、ゴンドラは夕食のレストラン「タベルナ・ラ・フェニーチェ」の近くの船着き場に止まった。昼食を自炊で賄ったので、今夜はベニス屈指のレストランでの晚餐となった。

## オリンピック

「ジョイナーを見たいなあ、ジョンソンとカールイスも面白いぞ」

一九八八（昭和六三）年 十月、ソウルオリンピックが始まったばかりの時、連日、競技がテレビで放映され、矢も楯もたまらなくなった小学校時代からの友人の得永史郎が仲間たちと一緒に是非観戦ツアーを組んでほしいと言ってきた。

日本国内での入場券販売のオフィシャルエージェントになっているJTBは、本社にオリンピックの事務局を設置していた。早速、飛行機及びホテルの仕入れと並行して、入場券の確保を事務局に依頼した。ところが既に各種目の入場券は発売済みとなっていた。そこでソウルの現地あっせん事務所に掛け合ってもらい、何とか人気種目の陸上競技と柔道の入場券が手に入る見込みとなり出発した。

オリンピック競技場のゲートをくぐると大きな歓声が聞こえてきた。指定席に座るとお目当ての女子二百メートルの準決勝が、我々のちょうど前をスタート地点にして始まるころだった。ジョイナーがいる、光るような褐色の肌に布地の少ないウエア姿。手の爪のマニキュアも見事で、お尻を上げた独特のスタート練習を繰り返していた。あまりにも素晴らしいスタイルに圧倒されたのか、肝心の競技の結果は覚えていない。

そして柔道競技、館内に入ると、周り一面に韓国国旗がはためいて大音声が続く。確か韓国柔道が強かった頃だったか、韓国国内の選手権のような雰囲気には圧倒された。国を背負って競技する選手のこの雰囲気でのプレッシャーは、並大抵でないと改めて認識した。そして全員男性の仲間は力が漲みなぎって夜の街に繰り出した。

### 出向を命ず

「日本交通公社事業開発室勤務を命ず」の辞令を受け取ったのは一九七八（昭和五三）年六月、ホテル、旅館や運輸機関とのお付き合いが深まるにつれて、お客様を受け入れする関連企業を経験したいと思い自己申告していた頃だった。

出向先はJTBが運営する名古屋ターミナルホテルに決まり、単身赴任することになった。ホテルに着任早々、JTBの大先輩である菊澤常務役員に一年間はホテルの全部門を勉強させてほしいとお願いした。

最初の宿泊部門での研修中のある日、以前からお付き合いのある東京のKホテルの名古屋営業所長が来店されてホテルの岡本宿泊部長といっしょに夕食を共にした。所長は開口一番「これまで北河さんには、団体などの宿泊料金の交渉で無理を言われたが、ホテルはなかなか儲からないことを充分勉強してください」とニヤリとされた。お客様をお送りする側から、お受けする側に回った事を改めて認識した。所長の適切な時期を得たアドバイスに感謝、宿泊部長との連携プレーだったのかも知れない。そして食堂、宴会、資材、調理を予定通り研修した。

食堂の研修ではこんなこともあった。ホテルの制服に蝶ネクタイ姿でサービスをしていた時、名古屋のJTBのスタッフが食事に来て私の姿を見て吃驚びっくりしている。

それから名古屋の同期が連れ立ってやってくる。まるで人寄せパンダだ。ひよつとして、お客様への丁寧なサービスが評判になったのかなと思つた。

その後、管理部門を担当、ホテルは名古屋駅に隣接した立地で客室の稼働率も八十パーセントを上回り、結婚式、披露宴が年間五百組近くある人気ホテルだった。

しばらくして、今度はJTB大阪駅に大阪ターミナルホテルが計画され、その運営もJTBが行うことになり研修生を名古屋で受け入れることになった。当時の大阪ターミナルホテルのS取締役とは社員寮で隣組となり、研修は勿論、麻雀も勿論大いに頑張った事が懐かしい。出向は三年の予定が終了してJTBに復帰した。この三年間の経験は旅行業界と違った人たちとの交流で、今でも助けられることが多い。

## 先生と呼ばれた

白山市の金城短大（きんじょうたんたい）で五年間程、非常勤講師を務めた経験がある。

JTB時代に 修学旅行を担当していた頃、担当した学校の一つに金城高校（けんじょうこうこう）（現・遊学館高校）が有り、その短大で旅行ビジネス講座を週一回二コマ担当した。高校の修学旅行に添乗した時、当時の加藤晃理事長（かとうあきら）が一緒に熱心に生徒のお世話をされていた。そんな関係もあり非常勤講師をお引き受けした。

学校は大変活気があり、生徒がそれぞれの専門学科に意欲もって勉強している事が、先生方のお話からひしひしと伝わってくる。何事にも積極的な加藤理事長の心意気を感じられ、こちらも「やるぞ」という気持ちにさせられる。学校の廊下ですれ違ふと「キーさん、頼んだぞ」と来る。ますます責任重大なり。

その短大の生徒を当社にも採用した頃、しばらくしてから、ビジネス学科の先生が新入社員の現況を見にこられ「しっかり、やっていますか」。丁度その時、新入社員が旅行の受付カウンターでこやかに応対しているのを見て、先生の目が大きく丸くなったことがある。その生徒が授業で居眠りする姿が残像としてあったように、ギャップの大きさにびっくりした様子だった。

JTBに入社している社員もいて、今も時々仕事で会うことがある。その時「先生」と呼び掛けてくる。向こうは抵抗なさそうだが、こちらは目を白黒させること

になる。聞くところによると本人はお客様から評判の良い社員に育っているようだ。二年間、遊ぶこと、学ぶことをしつかり経験させて、社会の役に立つ人材を育てる。短大の役目は大きいと思う。

「金城高校」は「遊学館高校」ゆうがくかんこうこうに改名され、男女共学となりスポーツではサッカー、卓球、それに石川県の高校野球界では名門校に名を連ねる。そして幅の広い生徒を育てようとしているのに違いない。

### 「ザルツブルク」の浅野川

オーストリアのウィーンからザルツカングートのハルシュタット湖畔の町を経由ザルツブルクに入る。ここは「音楽の都」と呼ばれ、モーツアルトの生誕地でもあるので、独特の雰囲気を持っている。

ホテルは何度か泊まっている「ホテル ブリストル」で、ミラベル宮殿の近くにある。そのミラベル宮殿の「大理石の間」で開かれるモーツアルトのクラシックコンサートを鑑賞、二百メートル程の帰り道で、傘も役に立たないくらいの大変な雨に見舞われた。

コンサートに入る前に美しい宮殿のお庭をお見せするために散策したことが裏目に出てしまった。全員がびしょ濡れの状態のホテルに戻った。

翌日、街中の観光に歩いて出発、空は晴れ上がっていたので安心してご案内した。モーツアルトの生家を見学後、曲がりくねった道をしばらく歩いて昼食場所へ向かった。そしてレストランのテーブルに着いた時、夫婦参加のご主人が一人居ない。

「足並み揃えて安全に」は添乗員の基本動作だ。海外では何が起こるか分からない。金沢城を見学後、お昼は兼六園の茶店という感覚になる事がある。「天気が良いから、これで大丈夫」の油断が出てしまった。

ホテルに「団員が一人ホテルに戻ったら、そのまま待機させてほしい」と連絡した、私は来た道をたどってホテルに着くと、幸い本人はホテルに戻っていた。お話を聞きすると、「広場で写真を一枚撮って、振り向くと誰もいなかった」といわれる。そういえば食堂は広場から小路に入った直ぐのレストランの二階だった。

一六人が一斉に消えて、びっくりしてホテルに戻ったと言う。お詫びをして昼食に合流、団員から「あんたが付いていくような美人どこにおつたいや」と金沢弁。なんとかその場は収まりましたが添乗員失格。

翌朝、町を流れる「ザルツァッハ川」を団員と散策。誰ともなく「浅野川沿いを歩いているみたいやな」。団員も旅の空の下で故郷を思い出しているのだと感じた。私は浅野川を散歩コースにしているので、時々、どちらが旅の空かと思うことある。

## 団長で出発

「今度、店長のハワイ研修に参加してほしい。団長で」

年に二回管内の店長の研修旅行がある。たまたま北陸の責任者をしていた頃でお鉢が回ってきた。店長は会議等で顔をあわせている仲間であり、今回は海外旅行商品「JTBルック」を企画造成している別会社の社長も同行、幹事としてその会社の若手社員も一緒なので気楽に出発した。

大方の店長は添乗などでハワイは知っているが、今回はハワイ島のホテルや観光施設を中心に視察を行なった。五日間しっかり研修し、日曜日には海越えのコースのある名門ゴルフ場でのプレーを自由参加で楽しんだ。

そして最終日にはオアフ島のホノルルに入り、現地ホノルル支店との打ち合わせに入った。最初に現地責任者の挨拶で始まり、さあ打合せと思っていた時に「団長挨拶をお願いします」と、突然幹事が私を指名した。いつもは添乗員として私が言っている言葉だったので、おい、おい、となった。添乗員の習性がこびりついているのか、頭がこんがらかって何をしゃべったのか思い出せない。

話し方と云えば、当社の取締役をお願いしている能都町（現能登町）の山瀬町長も話術は天下一品である。その山瀬町長が何かの折に「小堀さん話し方が上手やね」と言った。小堀さんとは、当社の監査役の甚九郎です。そういえば上高地散策と松本市にあるフランス料理店「鯛萬たいまん」でお昼を頂くツアーの時の事。素敵な雰囲気です。食事が始まる時「団長、挨拶をお願いします」とお願いした。

するとゆっくり立ち上がり「北河君からは非参加してほしいと言われたが、私がお天気男なのを知っていて、山のツアーに番傘代わりに参加させたことがよく分かった」等と、ユーモアたっぷりで皆さんが和んだ事を思い出した。

ハワイの研修旅行の空港での解団式の挨拶は、添乗員団長の話ぶりだったのは間違いない。

### 旅館日本一のおもてなし

旅行業界に入って、多くの旅館の御主人にお会いする機会があった。最初にお目に掛ったのは金沢で古くから旅館を営んでいた人、戦前には画家の横山大観などが宿泊されたとお聞きした。

ある時その人に一つの質問をした。「旅行会社がお客様を旅館に斡旋すると、旅館には斡旋手数料を支払っていただく。このことについてお考えを」と率直に尋ねた。すると、ハッキリと「販促費用と考えている。それもお客様を送っていただいでの実益宣伝費」。新入社員としてモヤモヤしていた部分が解決、ビジネスライクに営業活動を展開する基本を教えられた。

その後、海外添乗中にはこんな場面があった。それはスイスのある有名な腕時計会社の本店で、お客様をご案内してショッピングの時間が終わって店を出ようとした時、責任者が私を事務所に呼んだ。「送客斡旋手数料を送金するのでサインを下さい」と言う。「御社との契約です」。世界的な時計会社が契約を必ず履行する。資本主義の商道德の徹底が信用となり、誰でも知っているあの大きな時計会社なのだ。

そんな中でも、和倉温泉「加賀屋」の先代小田孝女将は別格だった。

地元の旅行業界にこんなエピソードが伝わっている。当時、加賀屋に宿泊した団体の一行が名古屋への帰路に、乗っていたバスが事故に遭い、病院に入ったとの情報を受けて女将がお見舞いに駆けつけた。

一泊二日の旅行で更に入院となると着替え等が十分でないとの思いから、浴衣、洗面具を含め全員分用意して持参、幸い軽傷の方が殆どでその日のうちに名古屋へ無事帰られた。

宿泊されて帰られたお客様に対する心使いに感激したお客様から、沢山のお礼の連絡とお客様のご紹介も多くあったと言われている。

さらに先代女将の心は引き継がれ進化している。

二〇二四（令和六）年、元日の能登半島大地震で、かってない大きな被害にあった直後、「加賀屋」は和倉温泉のグループ四館の休館を決め、従業員が一丸となって宿泊客を避難場所に誘導し、ふとん等必要な寝具、食料を配布する。帰られるお客様の為に、金沢駅までの通行可能な道路の確認等で、時間は掛かったが無事に送り届けたことが聞こえて来た。

お客様の安全確保を第一に、自ら難局を切り抜けようとする地域の観光業のリーダーの姿がそこにある。お客様が無事お帰りになり旅館のサービスに満足を口にされるのを「おもてなし」と考えておられるようだ。

それが長年に渡り全国の旅行者の投票による「旅館日本一」の栄冠を手にしていく。この地震による被害は甚大で、復興はこれからの状況ですが、二〇二六（令和八）年末までに加賀屋グループは建物や内部の改装と、その後新館も開業させる計画が決まった事が聞こえて来た。

今は一日も早く能登地区全体が、日常を取り戻され、元気に再起される事を願うばかりです。

### 「ベルゲンでデート」

ノルウェーのベルゲンに到着したのは夕方、港の近くの海に面した「アドミラルホテル」に入った。ホテルでの夕食をゆっくりと頂き明日に備えた。

翌日、ベルゲンから急行電車に乗りソグネフィヨルド観光に出発です。途中駅のミュールダールで登山鉄道に乗り換えて、フィヨルド観光出発の港のフロム向かう。登山鉄道に乗り込んで間もなく、団員以外は欧米人だった車両に、日本人と思われる女性が前の席に乗ってきた。「どちらからですか」と、得意の日本語で話しかけた。ところが彼女は不思議そうに首をかしげる、暫くして今度は向こうから英語で話しかけて来た。「台湾からロンドン大学に留学し、今年卒業なので記念旅行に北欧へ来た」一人旅だという。

ゆっくり話が進むうちに、今度は通路を挟んだ右隣りのご夫婦が話に入ってきた。イギリス人でゴルフの聖地「セントアンドリュース」に住んでいる。「ゴルフツアーに来る機会があるならコースの手配は出来るよ」と嬉しいことを言ってくれる。この車両は編成の真ん中にあり、途中駅で二二〇メートルの落差の「ショースの滝」を見るには絶好の位置、いつもは車両の後方になる場合が多いが今回は一五名の小人数が幸いしたようだ。欧米人との雑談の機会も生まれる。

終着駅フロムで昼食後、フィヨルド観光船に乗り込んだ。約二時間、船の上からフィヨルドに点在する小さな村の景色を眺めていた。デッキでベンチに座り団員と話していた時、先程の台湾の彼女が寄ってきた。

「降りたらベルゲンへ戻ります。団体のホテルはどこですか」と尋ねる。一人旅で話し相手が欲しかったようだ。

団体の予定はベルゲンに戻り、ベルゲンの港の魚市場、世界遺産ブリッゲンの木造倉庫群を散策することになっていた。その後、ホテルでの夕食を済ますと八時過ぎるが、六月のベルゲンは白夜ややくでそれから賑わう。

そこで九時に港にある魚市場で、参加希望者数人と一緒に待ち合わせて、街の高台のオールド・ベルゲンの街並みを歩くことにした。細い石畳の路地裏に、小さなレストランや食料品店などが白夜に包まれ雰囲気を醸し出している。一軒のパブの海が見えるテラスでビールを注文する。

「台湾に帰って学校の先生になるつもり」と彼女は身の上を少しずつ話す。私の英語はテンポが遅いが、それでも旅の空の下で二時間交流できたことは得難い機会だった。

帰国後、一か月程して台湾に戻った事を知らせる手紙が届き、文末に「思い出に残る時間だった」と記されていたので、彼女の卒業記念旅行に変な外人が「刺身のつま」として少しは貢献したのかな。

## 積丹しゃこたんの夕日

「北海道の余市に美味しい果物があるぞ」。甚九郎の呼びかけに小堀ツアーの八回目は国内旅行に舞台は移った。

二〇〇五（平成一七）年九月、五泊六日の北海道の旅が始まった。

千歳空港から小樽へ向い、名物のお寿司で昼食。その後、余市の甚九郎行きつけの果物店「偕楽園」に到着。バスを降りて店に入ると、ご主人と思しき快活なご婦人が声を掛けてきた。

「ここにあるものは何でも食べてください」。所狭ましと果物が無造作に置かれている。しばらくすると、団員一六名が一つの果実の山に集まり、そして次々と口に入れて目をつむっている。それは黒紫色をしており、実は薄黄色のプルーンだった。皆が口々に「こんな美味いもんがあったがかいや」と金沢弁。いつもは時間に厳しくない添乗員も「積丹半島の夕日見物の時間が迫ってきたので出発です」。女主人の見送りを受けて「また来んなんね」「ほやな、又来んなん」と、ご夫婦の満足した金沢弁が聞こえてきた。

夕闇迫る中、バスが峠を越えて海岸線に下りた時、オレンジ色が辺りを染めて岬の岩陰が黒く、今まさに夕日が沈もうとしていた。団員の歓声を聞いてなんとか間に合って内心ほっとした。

その日の宿は岬近くの「運上屋」、昔は運送業を営んでいたとかでこの名があると聞いた。美人姉妹とお母さんが切り盛りする小さな宿。落ち着いた昔からの佇いで窓の外はすぐ海、食事は豊富な海の幸で姉妹が料理の説明をしてくれる。

夕食が始まり、ふとテーブルの上を見るとプラスチックのケースがいくつも置いてある。誰かがお土産に買ったプルーンで、我慢できずに並べた食後のデザートだ。

美味しいものに旬がある。そして美しい景色にも瞬がある

### 鶴来俳壇「高根社」

白山市鶴来町に三百年の歴史を持つ俳壇「高根社」がある。

その創立者の月江庵第一世から数えて、第一二世の三納鶴仙は小堀グルーの常連団員でもある。その郁子夫人は女丈夫で、旅先では「おとうさん、おとうさん」と旦那さんを探し回るので有名。ご夫婦は小堀家での月窯にも出席される。

手元に鶴仙ご本人の著作の私家版で俳句・俳論集「舟岡山」ふなおかやまがある。  
舟岡山は三納家のすぐ前にある小高い丘で、白山比咩神社が最初に鎮座された場所  
だと本人から聞かされた。

開いて最初に目についた一句。

ビーナスの横臥おうがへふはり夏蒲団なつぶとん

美人でスタイルの良い奥さんを思い切り詠んだ句

ヨーロッパの旅で一句。

北極ほっきょくの雪明かりゆきありてふ白きものしろ

北極圏のトロムソびやくやで白夜を詠んだ句

小堀家の甚九郎で一句。

客人きやくじんへ夏炉なつろの灰はいを均ならしおり

甚九郎の年中囲炉裏の火は落さない様を詠んだ句

普段から鶴仙本人は物静かで旅行中も、そこはかたなく「ゆっくりズム」が感じられ、旅も日常ととらえているようだ。それで自動車販売会社の経営者で「なんでもござれ」の加賀の芭蕉のような気もする。

### 「ダラットコーヒー」

一九九五（平成七）年のベトナム経済事情視察団の後、林会長の音頭で「北陸ベトナム友好協会」が設立された。

そして現地の日本語学校のホー・エー理事長を通じて、経済的に恵まれない家庭の学生に、会員の志で奨学金を贈る事業が始まった。

その後、奨学金を受けて勉強に励んだ学生が社会に出て、ベトナムの官界、経済界で活躍しているのを時折耳にする。

二〇一〇（平成二二）年、五月に開かれた上海万博で、ベトナム館を設計したヴォ・チョン・ギアもその一人。パンブーフオレストと呼ばれる、竹と植物をデザインに取り入れた建築家で、その時期に何度か金沢を訪れて協会の林会長と懇談している。

又、会員の元大リーガー松井秀喜選手には野球道具をベトナムに寄贈して頂き星稜高校せいりょうこうこうの山下元監督にも現地で野球の指導をお願いするなど、ベトナムの人々との絆が広がった。

ある日、「うまいコーヒーが見つかったぞ、ちょっとこんか」。林会長の標準語が電話口から聞こえてきた。早速訪ねると袋に入った現物を出してこられた。

「これ飲んでみんか、感想聞かしてくれまん」と金沢弁で矢継ぎ早に攻める。

ゆっくり味わって一言返した。「今まで飲んどったコーヒー、あれは一体何やったがいや」。その後、私の友人にも試飲してもらったところ皆びっくりしている。

私も協会の役をしていて奨学金の贈呈式に参加、又、他のツアーで何度も添乗しているのでベトナムのコーヒーは、充分知っているつもりだったが、今回のこのコーヒーは全く別物に感じた。

ベトナムの軽井沢と呼ばれるダラット高原で、手間のかかる特別な焙煎ばいせんをした門外不出のコーヒーで、これも現地の人達との交流が可能にしたことは確かだ。旅行は観光から人々の交流にすこしずつシフトしている様子が所々で見受けられる。平和産業の一番手として、旅行業が交流業と呼ばれるのも近いかも知れない

## オホーツク海の沿岸

ノルウェーの北極圏トロンムンに、小堀グループを二度ご案内している。

そのきっかけは写真が趣味でもある甚九郎が、一回目に沈まぬ太陽を撮影した写真が思わしくないのでもう一度となった。旅の後半はスイスアルプスをゆっくりと楽しむことにした、

一回目と同じメンバーが「また、沈まぬ太陽が見られるなあ」と一向に不思議がる様子もなく、嬉々ききとして集まって出発した。

ところが当日、ストールステネン山からの、沈まぬ太陽は、我々をじらす様に雲に隠れてなかなか姿を見せない。添乗員は穴があつたら入りたいとの思いで水平線を眺めていた。甚九郎はカメラにフィルムをセットしながらゆったり構えている。しばらくすると、水平線上にある雲が少し横に流れるように見えた。そして雲間から光が差ししてきた。丸々は見えなかったが、ちよつと見えるのも何とかの雰囲気になつてきた。甚九郎は、ここで「全部見えるよりも、この方が」と一言、団員全員の笑い声が辺りにこだました。

その二度目が終わってから、一年ほど経って「オホーツク海沿岸を車で走ってみよう」とお誘いを受けた。甚九郎はトロムソの雰囲気が好きで、日本の最北端の海岸線を選んだのだ。

最初は礼文島の香深かふかにあるプチホテル「コリンシアン」で二泊。ホテルのオーナーは東京で美容院を営んでいたが、奥さんの地元に戻りホテルを開業、ホテルの隅々まで清潔で、洋室の色合いも素敵にコーディネートされ居心地が良い。

レストランの食事は名物の馬糞ウニ、焼きガニ等「これでもか」の海の幸、日本酒は地元の酒屋さんから、小堀家の清酒「萬歳楽」を仕入れてお客様に供しているという。これには甚九郎もびっくり、すぐに小堀グループもご案内することが決まった。このホテルはJTBの協定旅館にもなっており、これは近江商人の「三方よし」ではないか。

稚内わかないから宗谷岬そうやみさき、浜頓別はまとんべつ、天塩てしお、興部おこべ、紋別もんべつ、湧別ゆうべつ、佐呂間さろま、女満別めまんべつと運転を交替しながら二日間、これが八十才を超えた人の運転かと思わせる元気で走り抜けた。

途中、紋別で一泊、翌日、毎年二月に流水が漂着する岸壁でカモメを眺めながら小休止、甚九郎とお付き合いが始まった日本酒造組合連合会の大会の観光旅行の下見に、能登半島と一緒に巡ったことが思い出され、お互い懐かしく又とない思い出が出来た。

## 「カルチャー百万石」

国内、海外の添乗を六〇年、振り返ると地元の観光案内を置き去りにしていた事に気が付いた。そして日本でも有数の観光地「金沢」に住んでいながら情けない。

以前、スペインのマドリードの市内観光でお世話になった地元のガイドが「世界をガイドして方々回ったが、今は市内のガイドに徹している」と話してくれたのを思い出した。長い間、お世話になっている甚九郎にこの話をする、「北陸新幹線開通で観光客は増えるが、ここに住む人が地元の観光地の歴史、文化などをしっかり知らないとおもてなしは出来ないよ」と、観光のおもてなしについて語ってくれた。

北陸新幹線が二〇一五（平成二七）年三月に開通、金沢市が国指定の「観光モデル都市第一号」になっているので「金沢・近郊魅力深掘り」を目的に、「カルチャー百万石」の商標登録を済ませ、バスツアーを企画して実施することにした。

NHK金沢放送局の旧知の女性アナウンサーI女史にこの情報を提供すると「北河さんそれは困ります。先輩のアナウンサーが、同じ名前の番組を以前からテレビで放送している」と言う。

私は今までその番組を知らなかったが、石川県内の歴史、文化、芸能、行事等深く紹介している素晴らしい番組だった。確か年配のアナウンサーが担当されていたので、同じ年配者としてその番組に負けない旅行商品を作ろうと決心した。

そのNHKの番組は現在「石川の壺」の名前で続いている。

二〇一六（平成二八）年一月、日帰りバスツアー販売開始、金沢駅を朝九時三〇分発、午後三時三〇分着、昼食は老舗料亭やホテル、観光は美術館やお庭、神社・仏閣やイベントなどのカルチャーが中心、七〇代から最高年齢百一才のお客様がコロナ禍に負けずに、今までに四千名様を超えるご参加を頂いた。

地元紙「北陸中日新聞」に広告、宣伝をお願いして読者の皆様にもご利用いただき大変お世話になっている。各コースとも勿論、私が主任添乗員ですが、コロナ禍を機に「消毒師」としてバス車内の消毒、お客様の手指の消毒、行動中の安全確認等「ああせい。こうせい」と気を使ってくれる、私の介護師が同乗しているのは今までとちよつと違うところだ。

## 百万石のお庭拝見

兼六園から導水した池を持つお庭がある。旧加賀藩前田家と関係の深い歴史的な庭園の名は、「西田家庭園・玉泉園」、そこにレストラン「玉泉邸」があり、JTB時代の仲間で宣伝部門にいたD君が支配人として頑張っていた。

「カルチャー百万石」の目玉商品として「百万石のお庭拝見」コースの昼食をお願いしたところ、「お庭の見える部屋で二五名様程度なら可能です」との返事だった。料理長は金沢の老舗料亭で修行された若手の片折料理長とお聞きした。

次に寺町にある旧加賀藩の家老横山家の別邸「辻家庭園」に狙いを定めた。辻家庭園の辻卓社長にお会いして見学をお願いした。すると「木曜日なら時間が取れるので、宜しければ私が庭の説明もします」。「有難く、よろしくお願いします」と、握手した。

もう一つは、金沢の二俣にある本泉寺、「九山八海」と呼ばれるお庭は、浄土真宗の僧、蓮如上人の作庭といわれる。加賀一向一揆に関係のあるお寺としても有名。金沢駅から車で三十分程の山手にあり、お伺いして快く見学許可を頂いた。

日頃、仲間からは時々、甚九郎は黄門さん、旅行屋の私が助さん、指物師の西田守男が格さんと呼ばれている。なぜ私が助さんなのかは分からない。

ある時、その格さんから電話が来た。「玉泉邸の片折料理長から、浅野川の天神橋の袂にある自宅で店を開きたい。ついては数寄屋風に改装したいのでお願いしたい。」と連絡が来たという。

「百万石のお庭拝見」での片折料理長の評判は、どなたも唸らせる味と雰囲気での好評、その中身は、調理長は朝四時起床、魚は能登方面の魚市場で仕入れて当日使い切り、野菜、お米も特別に選んで契約している。ごはんはお一人でもお釜炊きで、器も料理人生活の中で選び抜いている、いよいよご自分のお店を持つのだ。

格さんはお茶には厳しく道具にも凝っていて料理好きときている。また金沢にある職人大学校では数寄屋建築を教えていた。

そんなことから「日本料理・片折」の普請もさぞかし気持ちの入ったお店に仕立てたと思われる。小ぶりの店なので団体で利用出来ないのを残念に思っている。

開店間もないのに都会からのグルメや会社の接待利用などで予約が取れない状況だという。さらに天神橋を渡った川向こうに土地を準備して新館を建てる話が聞こえて来た。金沢でお寿司は「小松弥助」、日本料理では「片折」が日本に名立たるお店になっているようだ

### 「ステープ・ジョブス」と川瀬巴水

一九九八（平成一〇）年、アメリカのアップル社から発売されたパソコンが、丸味を帯びた斬新なデザインだったのを覚えている。その創業者のステープ・ジョブスが日本の版画家「川瀬巴水」のファンである事を後で知り、そのデザインにも影響したのだと思っていた。

その版面の展覧会が石川県立美術館で、二〇二三（令和五）年九月、開催されたので、「カルチャー百万石」のコースに組み込み販売することにした。

主催の北陸中日新聞社の企画担当者に「作品の説明や、案内等の掲示は少し大きめの字体で」とお願いしたら「今回は、当社がその表示も担当するので大丈夫です」との返事が返ってきた。

昼食は度々利用させていただく「しいのき迎賓館」のフレンチ「ポール・ボキューズ金沢」にお願いした。支配人は私と同じ北河の姓を名乗っておられて「お互いの先祖は旧加賀藩前田家と一緒に、名古屋から流れて来たのかも」と仲良くしている。午後は大樋焼の窯元の「大樋美術館」で、十一代家元の奥様のご案内で作品のご説明を頂き、歴代家元のお茶碗でお抹茶と干菓子をいただいた。

二回実施したが嬉しいハプニングがあった。川瀬巴水の作品が一八〇点、加えて説明書が大きく分かり易い。更に小学生向きの説明文も表示されていて、見学時間が不足気味となる。古希を超える年齢の皆様が、どちらの説明書を御覧になったのか聞くのを忘れたが、皆様の並々ならぬ作品に対する興味の深さに感服して、見学時間を延長、「カルチャー百万石」にかすかな自信も芽生えた。

「人の喜びを、わが喜びとする」

一九五六（昭和三一）年、第一次南極越冬隊の隊長に任命され、南極に渡ったにしほりえいさぶろう西堀栄三郎の講演会が東京で開催されることを知り、一九七九（昭和五四年）に北陸ミサワホームの林会長はそれに参加した。

講演内容は西堀先生の「品質管理の手法」を中心に話が進んだが、その中で気に留めた言葉があった。

講演終了後に、林会長は初対面ではあったが思い切って楽屋を訪ねると、先生は「遠い所から、よく来てくれました」と快く応対して下さいました。賑やかに話が進み、頃合いを見て「人の喜びを わが喜びとする」の言葉で人の 愛について話されたことに感じ入り、是非、当社の社員にご講演をお願いしたいと頼み込み、そして会社が厳しい状況にある事なども説明した。

すると先生は突然立ち上がり、大きな声で「会社の経営にも愛が必要だ、お客様にも従業員にも愛を持って接している会社はつぶれない、早速に都合を付けてお訪ねする」。

後日、先生は全社員を前に、ゆっくりとした口調でお話され、感激の面持ちで役員や社員が聞き入った。その後、「愛」を会社のモットーにして、会社のグループ名を「アイ・フィットグループ」とする事に決まった。

この出来事が機会となり林会長は何度も西堀先生にお目にかかり、ある時先生の南極越冬隊の話で盛り上がった。そして、二〇一二（平成二四）年から、南極越冬隊に社員一名を木質パネル構造の建物管理、補修要員として何度か南極に派遣している。

その派遣が始まった同じ年に、林会長は致知出版社ちしゅつぱんしゃが発行する月刊誌「致知ちち」の十二月号に「将の資格」のテーマでインタビューを受け、金沢弁が標準語の使い手なのに一切使うことなく非日常の言葉だけで応対している。

その中で、一九九五（平成七）年のベトナム経済事情視察団の事に触れて、それをきっかけにベトナムの人々との交流が盛んになり、輪が広がっていることを喜んでおられ、そのツアーを担当した添乗員としては望外の喜びを感じている。

現在、ベトナムの関係はご子息の林<sup>はやし</sup> 諭高<sup>ゆたか</sup>社長がサイゴンに事務所を設けて現地の住宅関連事業にも力を入れている。先日、林社長が訪ねて来られて、ベトナム交流三十周年記念パーティを今年一一月にホーチミン市で開催する事を知らせてくれた。

上がりにかえて

「添乗すごろく日記」をまとめるにあたり、久し振りに古い日程表や写真を取り出してみると懐かしい思いで一杯になる。同時に旺文社文庫の「徒然草<sup>つれづれぐさ</sup>」一九七一年版（昭和四六）年版を何気なく取り出した。

その有名な序段（原文）

つれづれなるままに、日暮らし、硯<sup>すずり</sup>にむかひて、心に移りゆくよしなし事をそこはかたなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ

（意識）何もすることなく、机に向かい心に浮かぶことを、何となく書いていると怪しげな気持ちになる。

その五二段（意識）

京都の仁和寺<sup>にんなじ</sup>の僧侶が 石清水八幡宮<sup>いwashimizuはちまんぐう</sup>に徒歩（片道二〇キロ弱）で参詣した。ところが山の上にある本宮には行かずに、麓<sup>ふもと</sup>の極楽寺<sup>ごくらくじ</sup>、高良神社<sup>こうらじんじや</sup>を本宮と思い込み参拝して帰る。仲間には、石清水八幡宮参拝と報告したが、間違いに気が付いていない。

その文末（原文）

少しのことにも、先達<sup>せんだつ</sup>はあらまほしき事なり。

（意識）些細なことについても、案内人はあってほしいものである。

江戸時代には、お伊勢参りが盛んで伊勢神宮の御師が、参拝客の宿泊のお世話や案内人として活躍していた。それから遡ること四百年程前の鎌倉時代に、旅には案内人が必要だと示唆している。流石、日本三大随筆家の一人と言われる兼好法師は、世の動きを先取りしている様だ。

さて、今や八十路のやんちゃ坊主爺を、これまで陰になり日向になり支えていただいた皆様に心よりお礼申しあげます。又、文中にご登場いただいた方々の敬称を、生意気にも略させて頂きました事、ひらにご容赦の程お願い申し上げます。

これからも、甚九郎の口ぐせだった「満足は当たり前、感動が一番」の言葉に心して、「カルチャー百万石」を企画、販売、添乗して、ご参加の皆様には人生百年時代に相応しい、「心温まる旅」を身体の許す限りご案内させていただきたいと思っております。

本日は二〇二五（令和七）八月一五日、時あたかも、終戦記念日にあたります。正午の時報とともに戦没者への黙とうを捧げました。戦後八〇年、平和に過ごせたのも、先人の皆様のお蔭様と改めて感謝致しております。

「添乗すごろく日記」を、この三月よりまとめ始めてようやく完了の運びになりました。慣れないことに右往左往するのを、見守ってくれた妻に感謝して筆を置きます。

旅は平和のシンボルです、これからも平和であることを祈念致しまして、

「すごろく」のサイコロを一時納めます。